

# 秋田県文化財調査報告書第506集

秋田県文化財調査報告書第506集

## 上谷地遺跡(第2次)

—日本海沿岸東北自動車道(本荘～岩城)付加車線工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

上谷地遺跡(第2次)



2016.9

2016.9

秋田県教育委員会

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の  
「岩偶」です。  
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

かみやちいせき  
上 谷 地 遺 跡 (第2次)

— 日本海沿岸東北自動車道(本荘～岩城)付加車線工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I —

2016・9

秋田県教育委員会

## 序

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、高速交通体系の整備は、内外の人々が活発に交流・連携する秋田の創造を目指すうえで根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道（本荘～岩城）付加車線工事に先だって、平成27年度に実施した上谷地遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。調査の結果、中世の竪穴状遺構をはじめ、縄文時代の土器、石器、平安時代の須恵器、土師器等が見つかり、当時暮らした人々の土地利用や中世城館の一端をうかがい知ることができました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助になることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び本報告書の刊行にあたり、御協力をいただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、由利本荘市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成28年9月

秋田県教育委員会

教育長 米田 進

## 例　言

- 1 本書は、日本海沿岸東北自動車道（本荘～岩城）付加車線工事に伴い、2015（平成27）年度に発掘調査した上谷地遺跡の発掘調査報告書であり、同事業に係る報告書の1冊目である。秋田県教育委員会では日本海沿岸東北自動車道建設に伴い、2001（平成13）年～2003（平成15）年の3か年にわたって上谷地遺跡を発掘調査し、その成果は『上谷地遺跡・新谷地遺跡』（秋田県文化財調査報告書第395集）として、2005（平成17）年に刊行済みである。本書は、同自動車道に関連して県教委が発掘調査した上谷地遺跡の2冊目の報告書となるため、「上谷地遺跡（第2次）」と標記することとした。
- 2 調査の内容については、すでにその一部が『平成27年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』などによって公表されているが、本書を正式なものとする。

### 3 調査要項

遺　跡　名 上谷地遺跡（かみやちいせき）

遺　跡　略　号 6KYC

遺　跡　所　在　地 秋田県由利本荘市土谷字小深田44-2外

調　査　期　間 平成27年6月24日～8月12日

調　査　面　積 850m<sup>2</sup>

調　査　主　体　者 秋田県教育委員会

調　査　担　当　者 栗澤光男（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主査）

伊豆俊祐（秋田県埋蔵文化財センター調査班 文化財主事）

総　務　担　当　者 齊藤憲治（秋田県埋蔵文化財センター総務班 主査）

調　査　協　力　機　関 国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所

- 4 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1『本荘』、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所提供的1,000分の1『本荘地区道路改良工事図面』である。

- 5 遺跡基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』によった。

- 6 第4章の「理化学的分析」は、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した成果報告である。

- 7 本書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したもののが、由理樋・駅家研究会より提供していただいたものを使用した。

- 8 本書の執筆は、第3章第3節8及び第5章を五十嵐一治が、その他を栗澤光男が行い、全体の編集は栗澤光男が行った。

- 9 発掘調査では、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、由利本荘市教育委員会、由理樋・駅家研究会の協力を得た。

## 凡 例

1 遺構番号は、検出順に下記の略記号と通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

S K I . . . 壁穴状遺構

S K . . . 土坑

S N . . . 焼土遺構

S D . . . 溝跡

S F . . . 土手跡

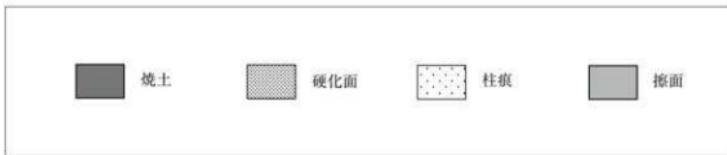
S M . . . 道路跡

S K P . . . 柱穴様ピット

2 調査区の基本層位にはローマ数字を、遺構の堆積土には算用数字を使用した。

3 掘図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず通し番号を付した。

4 掘図（遺構・遺物図）に使用したスクリーントーンは、下記のとおりである。



## 目 次

序	
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
挿図目次	iv
表目次	v
図版目次	v
第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 基本層序	11
第3節 検出遺構と出土遺物	14
第4章 理化学的分析	35
第1節 放射性炭素年代測定	35
第5章 総括	41
国版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	4
第2図 地形区分図	5
第3図 上谷地遺跡と周辺遺跡位置図	8
第4図 調査区とグリッド配置図	12
第5図 基本層序図	13

第6図	遺構配置図	15
第7図	S K I 5	16
第8図	S K I 7・10	17
第9図	S K I 24・25・27	19
第10図	S K I 29・30・31・49	21
第11図	S K I・8・14・42、S K I 15	23
第12図	S N39、S D 3・4、S F 28	25
第13図	S M26	27
第14図	S K P 2・13・16・20・21・36・41・43・45	29
第15図	出土遺物（1）	32
第16図	出土遺物（2）	33
第17図	出土遺物（3）	34
第18図	暦年較正結果（1）	39
第19図	暦年較正結果（2）	40
第20図	上谷地遺跡範囲図	42
第21図	秋田県教育委員会発掘調査における上谷地遺跡遺構配置図	43・44

## 表目次

第1表	上谷地遺跡周辺遺跡一覧（1）	9
第2表	上谷地遺跡周辺遺跡一覧（2）	10
第3表	出土石器一覧（縄文時代）	34
第4表	測定資料および処理	36
第5表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	37

## 図版目次

図版1	1 遺跡遠景（北から）：南に鳥海山を望む（由理橋・駅家研究会提供）	
	2 遺跡遠景（南西から）（由理橋・駅家研究会提供）	
図版2	1 調査区遠景（南東上空から）	
	2 調査区遠景（南西上空から）	
図版3	1 調査区全景（西から）	
	2 調査区全景（上が東）	

- 図版4 1 SKI 5・7 (西から)  
2 SKI 5 (北西から)  
3 SKI 5 (西から)  
4 SKI 7 (南西から)  
5 SKI 7 (西から)
- 図版5 1 SKI 10・24・25・27 (西から)  
2 SKI 10 (北から)  
3 SKI 24 (西から)  
4 SKI 25 (西から)  
5 SKI 27 (西から)
- 図版6 1 SKI 15・29・30・31・49 (西から)  
2 SKI 29 (西から)  
3 SKI 30 (西から)  
4 SKI 31 (西から)  
5 SKI 49 (西から)
- 図版7 1 SKI (西から)  
2 SK8 (南西から)  
3 SK14 (西から)  
4 SK42 (北西から)  
5 SD3 (北西から)  
6 SD4 (北西から)
- 図版8 1 SF28・SM26 (西から)  
2 SF28 (南から)  
3 SF28 (南西から)  
4 SM26 (西から)  
5 SM26 (西から)
- 図版9 出土遺物 (1)
- 図版10 出土遺物 (2)

## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市にかけての日本海沿岸とともに県内の高速交通体系を改善し、地域の生産活動と県民生活に必要な情報と資源の交流を促進することを目的として計画された総延長340kmの高速道路である。現在秋田県内では、象潟ICから秋田自動車道の河辺JCTを経て二ツ井白神ICまでと、二井田真中ICから小坂北ICを経て小坂JCTまでが供用されている。

上谷地遺跡は日本海沿岸東北自動車道建設事業に係り、平成13年度から15年度まで3か年にわたり調査が行われた遺跡である。調査の結果、縄文時代後期の水さらし場遺構や、祭祀が執り行われたと思われる平安時代の井戸跡が見つかっている。

今回の発掘調査は、現状2車線の路面が波打つなど痛みがひどく、未調査の空き地を通行利用せながら現状の2車線を修繕する計画が立案されたことに伴い、国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所長から、秋田県教育委員会教育長あてに依頼された埋蔵文化財発掘調査である。秋田県教育委員会では、平成27年4月22日に国土交通省東北地方整備局秋田河川工事事務所、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室、秋田県埋蔵文化財センターの三者が現地において調査面積の確認、排土地確保など発掘調査全般にわたって協議を行い、平成27年6月24日から発掘調査を実施した。

### 第2節 発掘調査の経過

平成27年6月24日から8月12日まで実施した発掘調査の経過は次のとおりである。

#### 【第1週】 6月24日～6月26日

- ・24日、事務手続き及び諸注意、機材準備を行う。午後より調査を開始。
- ・確認調査トレンチの埋め戻し土を除去し、完了した。トレンチは4条(T1～T4)。T1東端で土坑を1基検出した(SK1)。
- ・北西側斜面に斜面を横断するトレンチを設定した(T5)。斜面裾より階段状に掘削し、斜面部の土層観察のほか、排土用の作業路に用いることとした。

#### 【第2週】 6月30日～7月3日

- ・30日、T3トレンチの排土、調査区内の下草を人力で調査区外に搬出。
- ・1日、調査区南側より粗掘りを開始。粗掘りの排土、T1トレンチの排土を調査区南側に一時的に集積。
- ・2日、北西斜面に排土台を設置。T5トレンチを利用し、一輪車で斜面下への排土を開始。

#### 【第3週】 7月6日～7月10日

- ・調査区南側から順次粗掘りを進めた。I層(表土)、III層(遺物包含層)、IV層(漸移層)の順に層位的に掘り下げ、V層(基盤層)上面まで掘り進めた。調査区中央西側の一部ではII層(時期不明の盛土整地層)が存在するため、II層上面までの掘り下げを行った。

・調査区北側のL033区で鉄滓が一点出土した。また、調査区全体から土師器や須恵器が散発的に出土した。

・大半の遺構の掘り込み面はⅢ層上面であるが、同面における遺構検出は困難であることから、Ⅴ層上面での検出を行った。それとは別に、Ⅱ層上面から掘り込まれた遺構も存在することから、Ⅱ層の存在する調査区中央西側ではⅡ層上面での遺構検出を行った。

【第4週】7月13日～7月17日

・調査区北側の根掘りと調査区南側～中央の遺構検出作業及び遺構精査を行った。  
・調査区中央～北側で竪穴状遺構を3基検出した。遺構は斜面を掘り込んで構築されており、周辺では岩倉館跡(由利本荘市)に類似がある。ただし、遺物の出土ではなく、時期は不明である。

【第5週】7月21日～7月24日

・調査区全域の遺構検出作業及び遺構精査を行った。  
・雨天時、調査区丘陵裾の除草作業及び排土整理を行った。  
・調査区内で検出した竪穴状遺構は計7基となった。いずれも斜面をベンチカットして構築されており、調査区の段状地形に対応している。遺物は出土しておらず、時期は未確定だが、調査区内から中世の遺物が出土していないことから古代に帰属するものか。  
・溝跡や竪穴状遺構の周辺で柱穴様ピットを複数検出。あまり規則的な配置は確認できないが、溝跡や竪穴状遺構に伴うピットの可能性を考慮しつつ精査を進めた。  
・23日、シン技術コンサル、空中写真撮影の打ち合わせのため来跡。

【第6週】7月28日～7月31日

・調査区全域の遺構検出作業及び遺構精査を行った。  
・調査区南部で新たに竪穴状遺構を3基検出した。うち8基は、調査区の上から2段目の平坦面において、一部重複しながら並ぶ。いずれも斜面をベンチカットして平坦面を作り出すように構築されており、調査区内の段上地形はこれら竪穴状遺構の構築に伴って形成されたものと考えられる。同様に、調査区中央西部に存在する盛土整地も、竪穴状遺構構築時の排土により造成されたと考えられる。遺構内から遺物は出土していないが、盛土内から土師器片が出土していることから、遺構の時期は古代以降と推測される。  
・調査区南東部で土手跡を検出した。Ⅲ層遺物包含層より下位に存在しており、古代～中世の造成と考えられる。土手跡より下位の斜面にはガラス瓶等が混じる現代の盛土が厚く堆積している。  
・調査区中央東部で道路跡を検出した。段上地形の1段目と2段目をつなぐように存在し、わずかな窪みと硬化面により確認した(調査前の段階で道路状の窪んだ地形を確認していた)。道路跡は竪穴状遺構と重複しており、新しい時期の形成であるが、遺物の出土はない。道路跡の西側の延長線上には前述の土手跡が存在するが、ちょうど道路跡の延長線上で土手跡が途切れることから、土手跡は道路跡と同時期、あるいは道路跡の形成により削平された(道路跡より古い)と考えられる。

【第7週】8月3日～8月7日

・調査区全域の遺構検出作業及び遺構精査を行った。  
・3日、調査区丘陵斜面の地形測量を実施。  
・6日、空中写真撮影を実施。

【第8週】8月10日～8月12日

- ・残る遺構の精査を行い、調査を完了した。
- ・調査区中央西側に残る盛土整地層を基盤層上面まで掘り下げたが、遺構は確認できなかった。
- ・10日、調査区丘陵上の地形測量を実施。先週の測量分と合わせ、調査区全域の地形測量を完了した。
- ・同日、国交省の担当官ほかが来跡。現場の撤収スケジュール等について確認を行った。
- ・12日、機材搬出等を行い、現場を撤収した。

### 第3節 整理作業の経過

平成27年8月から出土遺物の洗浄、注記作業後に選別作業を進め、引き続き実測作業と発掘現場で作成した図面類および写真データの整理作業を実施した。理化学的分析に関する業務委託も同年に実施した。報告書作成は平成28年3月までに割付を終了し、この後9月までに版下の編集及び印刷・製本作業、そして図面類、写真データの記録類、ならびに出土遺物の集成及び収納作業を行って、整理作業の全工程を完了した。

#### 参考文献

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第365集 2001(平成13)年

秋田県教育委員会『上谷地遺跡・新谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXII－』

秋田県文化財調査報告書第395集 2005(平成17)年

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

上谷地遺跡が所在する由利本荘市は、秋田県の南西部に位置し、北は秋田市、東は大仙市・横手市・雄勝郡羽後町・湯沢市、南西はにかほ市、南は山形県酒田市・飽海郡遊佐町・最上郡真室川町に接し、西は日本海に面している。鳥海山麓に源を発し、芋川・石沢川などの支流を持つ子吉川が、市内のほぼ中央部を北西に向かって流れ下り日本海に注ぐ。また、市内を南北にJR羽越本線が縱貫し、市中心部から由利本荘市矢島町まで南東に由利高原鉄道「鳥海山ろく線」が通っている。さらに、海岸沿いに秋田・山形両県を結ぶ国道7号が走り、これから芋川に沿って国道105号が大仙市方面に、石沢川に沿って国道107号が横手市方面に、子吉川に沿って国道108号が湯沢市方面に走っており、交通の一大要衝地となっている。

上谷地遺跡は由利本荘市土谷に所在し、JR羽越本線羽後本荘駅の北東約1.5km、北緯39度23分16秒、東経140度04分37秒に位置している(第1図)。

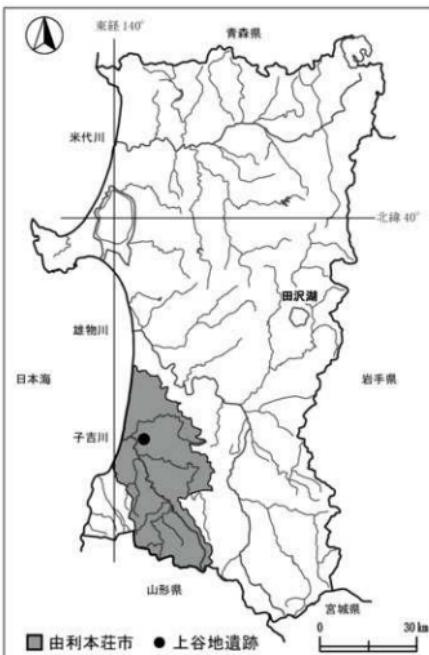
遺跡周辺の地形を地形区分図(第2図)によって大まかに見ると、東から権現山山地(I a)・鬼倉山山地(I b)、出羽丘陵に連なる中央丘陵地(II c)・子吉川・芋川低地(III a・III c)、北由利・子吉川丘陵地(II b・II d)があり、その西に本荘・西目移丘陵地(III g・III h)があつて海岸線に至っている。

遺跡は遺跡東側の寺岡と呼ばれる標高20m台の丘陵地とこれに接する標高7.1~8mの水田地帯に立地している。

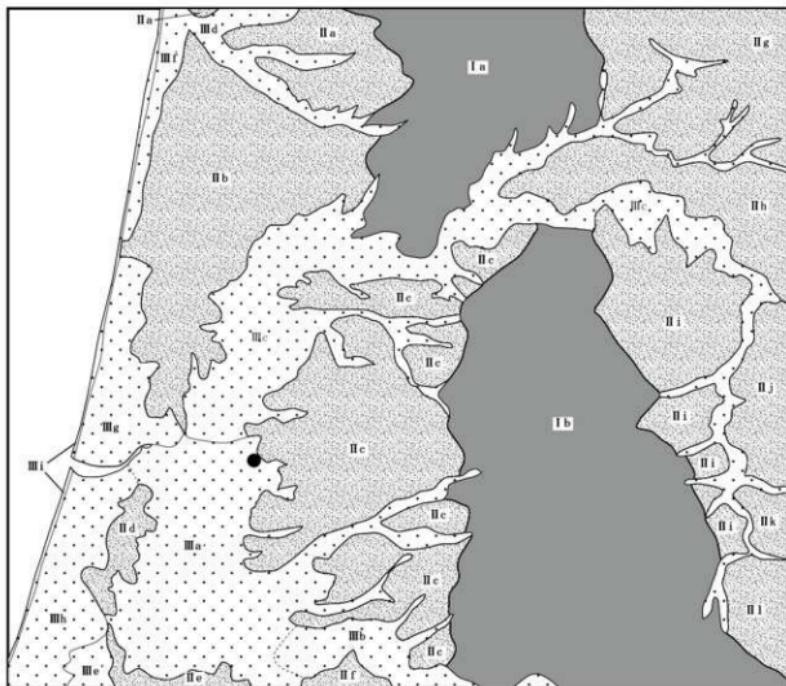
### 第2節 歴史的環境

由利本荘市域には、旧石器時代から近世までの遺跡が多数確認されており、これらの遺跡は、日本海に注ぐ子吉川、西目川などや、その支流の諸河川流域の平地と、段丘や丘陵地に分布している。(第3図)

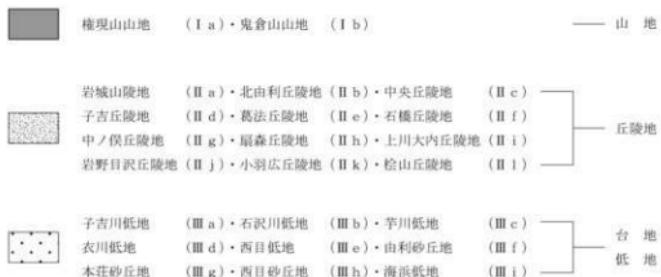
第3図は、南北11.75km・東西8.00kmの範囲である。ここでは、当地域の遺跡を中心的に歴史的環境を概観する。



第1図 遺跡位置図



● 上谷地遺跡



第2図 地形区分図

なお、この国幅範囲で旧石器時代の遺跡は確認されていないが、由利本荘市域における旧石器時代の遺跡としては、子吉川上流域の鳥海地区国見遺跡、矢島地区桃野Ⅰ・Ⅱ遺跡、花立梨平遺跡、芋川流域の大内地区オノ神遺跡が確認されている。これらの遺跡からは、ナイフ形石器・搔器・石刃などが採集されている。

縄文時代の遺跡は、早期の菖蒲崎貝塚(14)・子吉川底遺跡(15)、前期の船岡台遺跡(24)・土谷白山遺跡(46)・土花遺跡(47)・オシダテ遺跡(62)・菖蒲崎貝塚・子吉川底遺跡、中期の田尻遺跡(16)・薬師堂遺跡(21)・鳴瀬遺跡(48)・船岡台遺跡、後期の大浦遺跡(12)・田尻野遺跡(17)・上谷地遺跡(1)、晩期の長老沼遺跡(18)・東町遺跡(19)・成沢台遺跡・大浦遺跡・田尻野遺跡が確認されている。菖蒲崎貝塚は子吉川と芋川の合流点に位置し、日本海沿岸における数少ない縄文早期の貝塚として重要な遺跡である。平成14年の調査で、800m以上の貝層が確認され、その厚さが最大で1m40cmあることが明らかになった。また、貝層から出土した貝の99%は汽水性のヤマトシジミが占めていた。この他にウグイ等の魚類やガニ・カモ類に属する鳥類遺体と共に人骨も出土した。当該遺跡は河川堆積物に厚く覆われた標高0m以下にある低湿地性の貝塚であり、まだ多くの貴重な考古資料が埋蔵されているようである。船岡台遺跡は由利本荘市南西部の丘陵地に所在し、前期末の土坑8基、中期の堅穴住居跡1棟が確認され、前期大木式土器・円筒下層式土器・北陸系の土器や石器・石斧・魚形文刻石などが出土している。上谷地遺跡は平成13~15年に調査が行われ、県内で初めての発見となる後期の水さらし場遺構が確認された。この遺構はトチの実のアケ抜きを行った施設であり、縄文人の生業と食物加工の技術を知る有益な資料である。

弥生時代の遺跡は、土花遺跡(47)が確認されている。弥生土器が少量出土したのみで、当時の様子を解明するに至っていない。

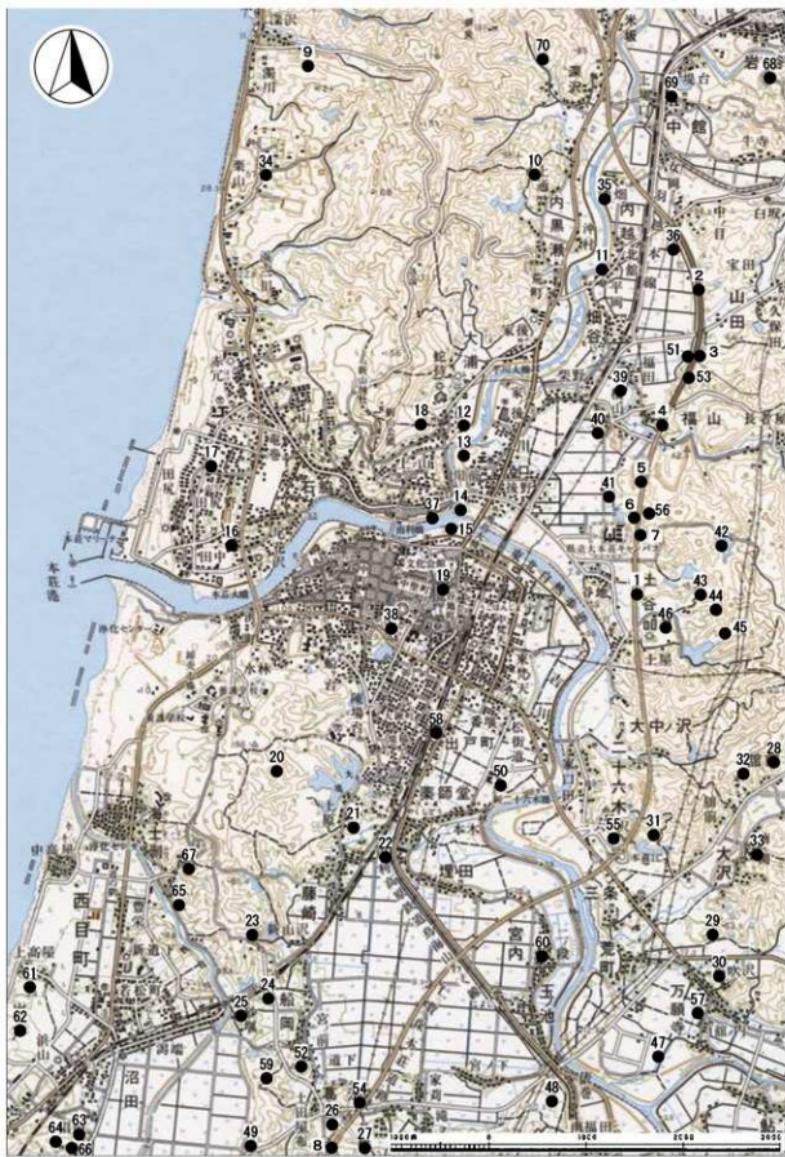
古代の遺跡(奈良・平安時代)は、樋ノ口遺跡(4)・上谷地遺跡・新谷地遺跡(7)・土谷遺跡・葛窯跡(27)・新ウルイノ遺跡(39)・横山遺跡(40)・大覚遺跡(41)・岩瀬堤遺跡(42)・宮崎遺跡(63)・子吉大堤遺跡・土花遺跡が確認されている。葛窯窯跡は、由利本荘市南西丘陵地の麓に所在し、8世紀末~9世紀初頭に操業の中心を置く半地下式の窯窯が3基確認された。遺物は全て須恵器で、壺・台付壺・台付碗・壺・壺が出土した。壺はロクロ水挽きによって形成され、切り離しは回転ヘラ切り、切り離し後の再調整はないものであった。横山遺跡は、由利本荘市北東の沖積地に所在し、10世紀の水田跡が住居とともに発見されている。十和田a火山灰の堆積状態からこの水田は、915年以前に營まれたと考えられる。古代の水田跡は、県内では初の発見例である。上谷地遺跡の所在する土谷地区は、古くから多数の遺物が出土しており、本荘西部の古雪地区と共に由理柵の推定地のひとつといわれている。由利本荘市教育委員会では、4次にわたって上谷地遺跡の分布調査を行い、土師器・須恵器・北宋銭・箸片・加工痕の残る板材が出土した。また、秋田県教育委員会による平成13~15年度の調査では、掘立柱建物跡・井戸跡等から、土師器・須恵器・北宋銭・木製品等が出土した。大覚遺跡からは銅印及び祭祀用木製品、土谷遺跡からはフイゴの羽口・大量の鉄滓や須恵器系中世陶器、新谷地遺跡からは土師器・須恵器や鉄滓が出土している。

中世の遺跡は、集落跡の大坪遺跡(2)・大浦遺跡・立花遺跡・鑄造遺跡の堤沢山遺跡(6)や城館跡がある。大坪遺跡は、子吉低地の東端に位置し、溝跡から中国産の青磁・白磁、常滑焼・渥美焼、須恵器系陶器等が出土している。大浦遺跡は芋川河口から900m上流の右岸に位置する。13世紀~15

世紀の陶磁器や錢貨と共に、掘立柱建物跡・鍛冶炉跡・竪穴状遺構、道路跡が確認された。土花遺跡は、万願寺地区の南部に所在し、須恵器系陶器や中国製の磁器と共に、建物跡・井戸跡や火葬墓が確認されている。堤沢山遺跡は新谷地遺跡の北西側に隣接し、梵鐘等の仏具の生産施設が確認されている。城館跡は岩倉館(5)・平岡館(11)・川口館(13)・子吉館(20)・埋田小館(22)・蝦夷館(23)・花館(25)・葛法山館(26)・荒城館(29)・万願寺館(30)・株切館(32)・本荘城(38)・鳴瀬館・エゾ館(64)・山崎館・蒲田館・湯保館・豊後館・大学館・田高館の館跡が確認されている。通説では、由利氏が平安時代末期から鎌倉時代の初期までこの地を支配したとされ、「吾妻鏡」には1189(文治5)年の奥州合戦の際に、鎌倉方に捕らえられたが、その立居が認められ、本領安堵された由利惟平の記事が見られる。1213(建暦3)年の和田合戦の後は、幕府女房の大式局が由利郡地頭となり、一族の小笠原氏に受け継がれ、分割譲渡を繰り返すなかで地縁的結合をもった庶子が党的性格の独立勢力になったものと推測される。北条得宗家の専制・鎌倉幕府滅亡・南北朝の争乱を経て、小豪族が割拠する「由利十二頭」の時代となる。「由利十二頭」の時代は、1590(天正18)年の奥羽仕置・太閤検地で終わりを迎える。中央政権の地域支配として由利五人衆が設定されたが、1602(慶長7)年には、関ヶ原の戦の功から最上義光の支配となり、重臣の楯岡満茂が入部した。この時に、満茂が統治の拠点として尾崎山に築いた本荘城を中心に、江戸期を通じて近世城下町として本荘は発展を遂げた。

#### 引用・参考文献

- 秋田県「土地分類基本調査 本荘」1980(昭和55)年
- 秋田県教育委員会「秋田県の中世城館」秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56)年
- 本荘市「本荘市史通史編Ⅰ」1984(昭和59)年
- 本荘市「本荘市史史料編Ⅰ上」1984(昭和59)年
- 本荘市「本荘市史史料編Ⅰ下」1985(昭和60)年
- 本荘市教育委員会「道路詳細分布調査報告書」1985(昭和60)年
- 秋田県教育委員会「秋田県埋蔵文化財センター研究紀要」第7号 1992(平成4)年
- 秋田県教育委員会「秋田県遺跡地図(由利地区版)」2001(平成13)年
- 秋田県教育委員会「大浦遺跡・芋川災害復旧等関連緊急事業に係る埋蔵文化財調査報告書-」秋田県文化財調査報告書第336集 2002(平成14)年
- 本荘市教育委員会「土花遺跡(第二次調査)-上野新田地区扱い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」本荘市文化財調査報告書第20集 2003(平成15)年
- 秋田県教育委員会「横山遺跡-内越地区扱い手育成基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」秋田県文化財調査報告書第363集 2003(平成15)年
- 秋田県教育委員会「大坪遺跡-日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XⅥ-」秋田県文化財調査報告書第375集 2004(平成16)年
- 秋田県教育委員会「上谷地遺跡・新谷地遺跡-日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XXII-」秋田県文化財調査報告書第395集 2005(平成17)年



(国土地理院 5万分の1「本荘」)

第3図 上谷地遺跡と周辺遺跡位置図

第1表 上谷地遺跡周辺遺跡一覧(1)

番号	遺跡名	遺跡地図登録番号	所在地	種別	主な遺構・遺物
1	上谷地	210-5-68	由利本荘市土谷字上谷地	集落跡	水さらし場遺構、繩文土器、石器、井戸跡、掘立柱建物跡、土師器、須恵器、木製品
2	大坪	210-5-102	由利本荘市畠谷字大坪	集落跡、鍛冶生産	溝跡、鍛冶炉、土師器、須恵器、須恵系陶器、常滑焼、酒呑焼、青磁、白磁、朱彩、鏡、鉄滓、如壁、羽口
3	芋種坂Ⅲ	210-5-91	由利本荘市福山字芋種坂	製鉄	繩文後期（土器）、古代～中世（鉄滓、如壁、羽口）
4	梯ノ口	210-5-85	由利本荘市福山字梯ノ口	集落跡、船跡	橋跡、空塗、土師器、須恵器、木製品（刀形等）
5	岩倉館	210-5-15	由利本荘市川口字岩倉	館跡	陶磁器、草庵寮、五輪塔、鉄製品
6	堤沢山	210-5-101	由利本荘市川口字大堤沢山	鉄造遺跡	鉄滓、如壁、錫燈（仏具）、青磁、銭貨、木製品
7	新谷地	210-5-69	由利本荘市土谷字新助沢	遺物含有地	土師器片、須恵器片、鉄滓
8	湯水沢	210-5-90	由利本荘市葛法字湯水沢	製鉄	製鉄炉、鍛冶炉、炭窯、土師器、須恵器、羽口、鉄滓
9	深沢	210-5-6	由利本荘市親川字深沢	遺物含有地	繩文土器片、中世錢貨
10	黒瀬館	210-5-7	由利本荘市内黒瀬字坂ノ下	館跡	腰郭
11	平岡館	210-5-8	由利本荘市内越字平岡	館跡	空塗、土塁
12	大浦	210-5-13	由利本荘市大浦字八走	集落跡	繩文土器（後期・晩期）、石器、土師器、須恵器、木器
13	川口館	210-5-14	由利本荘市川口字愛宕山	館跡	空塗、須恵器片
14	菖蒲崎貝塚	210-5-16	由利本荘市川口字下菖蒲崎	貝塚	繩文土器（早期・前期）、シジミ貝、魚骨
15	子吉川底	210-5-17	由利本荘市川口字下菖蒲崎付近	遺物含有地	繩文土器片
16	田尻	210-5-19	由利本荘市石脇字田尻	遺物含有地	繩文土器片（中期末：大木9・10式）
17	田尻野	210-5-20	由利本荘市石脇字田尻野	遺物含有地	繩文土器片（後期・晩期）
18	長老沼	210-5-21	由利本荘市石脇字上長老沼	遺物含有地	繩文土器片（晩期）、石甃、石斧、石鎌
19	東町	210-5-22	由利本荘市東町	遺物含有地	繩文土器片（晩期）
20	子吉館	210-5-23	由利本荘市水林	館跡	空塗、土塁、馬場跡
21	薬師堂	210-5-24	由利本荘市薬師堂字堂ノ下	遺物含有地	繩文土器片
22	埋田小館	210-5-25	由利本荘市埋田字小館	館跡	
23	鶴夷館	210-5-26	由利本荘市藤崎字苦竹沢	館跡	
24	船岡台	210-5-27	由利本荘市船岡字船岡台	遺物含有地	繩文土器（前期末・中期：円筒下唇式・吹浦式・大木式）
25	花館	210-5-28	由利本荘市船岡字船岡台	館跡	
26	葛法山館	210-5-29	由利本荘市葛法字山館	館跡	
27	葛法室跡	210-5-30	由利本荘市葛法字前坂	窓跡	須恵器环・高台坏
28	船前館	210-5-32	由利本荘市船前字船前	館跡	腰郭、須恵器四耳壺
29	荒城館	210-5-33	由利本荘市荒町字崩田	館跡	腰郭
30	万願寺館	210-5-34	由利本荘市万願寺字荒田日	館跡	帶郭、空塗
31	三条山	210-5-35	由利本荘市三条字定・沢	遺物含有地	繩文土器片
32	株切館	210-5-50	由利本荘市三条字株切館	館跡	
33	熊野神社	210-5-51	由利本荘市大沢字南間	遺物含有地	繩文土器片（後期）
34	西大台	210-5-60	由利本荘市浜三川字西大台	遺物含有地	鉄滓
35	新漆塗	210-5-61	由利本荘市内越字新漆塗	遺物含有地	土師器片
36	中ノ目	210-5-62	由利本荘市内越字中ノ目	遺物含有地	須恵器片
37	石脇中町	210-5-63	由利本荘市石脇字石脇	遺物含有地	繩文土器片
38	本荘城	210-5-64	由利本荘市尾崎	城跡	繩文土器片、石器、陶器片、磁器片
39	新ウルイノ	210-5-65	由利本荘市畠谷字新ウルイノ	遺物含有地	土師器片
40	横山	210-5-66	由利本荘市福山字横山	集落跡	水田跡、堅穴住居跡、土師器片、須恵器片

第2表 上谷地遺跡周辺遺跡一覧(2)

番号	遺跡名	遺跡地図登録番号	所 在 地	種 別	主 な 遺 様・遺 物
41	大覚	210-5-67	由利本荘市川口字大覚	遺物含有地	土師器片
42	岩瀬堤	210-5-70	由利本荘市上谷字音沼	遺物含有地	須恵器片
43	土谷田ノ沢	210-5-71	由利本荘市上谷字田ノ沢	遺物含有地	鉄洋
44	上谷堤下	210-5-72	由利本荘市上谷字堤下	遺物含有地	
45	土谷堂ヶ沢	210-5-73	由利本荘市上谷字堂ヶ沢	遺物含有地	
46	土谷白山	210-5-74	由利本荘市上谷字小深田	遺物含有地	繩文土器(前期)
47	土花	210-5-75	由利本荘市万願寺字土花	遺物含有地	柱穴
48	鳴瀬	210-5-79	由利本荘市葛字鳴瀬	遺物含有地	
49	移石	210-5-81	由利本荘市船岡字移石	遺物含有地	
50	薬師堂上野	210-5-84	由利本荘市薬師堂字上野	散布地	獨立柱建物跡、堅穴状遺構、井戸跡、土師器、須恵器、木製品、鉄製品、両面器
51	芋棟坂I	210-5-86	由利本荘市福山字芋棟坂	散布地	土師器、須恵器
52	船岡家ノ下	210-5-87	由利本荘市船岡字家ノ下	散布地	土師器
53	芋棟坂II	210-5-88	由利本荘市福山字芋棟坂	散布地	須恵器細片
54	長橋上	210-5-89	由利本荘市葛字長橋上	生産遺跡	土師器、須恵器、鉄圓鍛造物(鉄洋)
55	楓木田	210-5-92	由利本荘市二十六木字楓木田	散布地	土師器、須恵器
56	堤沢山II	210-5-93	由利本荘市川口字大学堤沢山	集落跡	繩文土器・石器、炭窯
57	万願寺新田	210-5-94	由利本荘市万願寺字堂ノ前	集落跡	
58	薬師堂谷地	210-5-95	由利本荘市薬師堂字谷地	散布地	土師器
59	船岡大沢	210-5-96	由利本荘市船岡字大沢	散布地	繩文土器・石器、溝跡、土師器、須恵器、陶器、鉄圓鍛造物、磁器、錢貨
60	宮内	210-5-98	由利本荘市宮内字上野	散布地	土器
61	土花	210-41-1	由利本荘市西日町出戸字浜山	貝塚	繩文土器(前期)・石器・石灘・石錐・貝類(ヤマトシジミ)
62	オシダテ	210-41-2	由利本荘市西日町出戸字浜山	遺物含有地	繩文土器片(前期)
63	宮崎	210-41-3	由利本荘市西日町沼田字宮崎	遺物含有地	土師器壺、高壺、長胴壺、須恵器、北大式土器、人骨
64	エゾ館	210-41-4	由利本荘市西日町沼田字大沼田	船跡	繩文土器片(前期)
65	鉢沢	210-41-22	由利本荘市西日町沼田字大沼田	遺物含有地	繩文土器片
66	汭下	210-41-28	由利本荘市西日町沼田汭下	遺物含有地	繩文土器
67	北沢	210-41-32	由利本荘市西日町海士瀬字北沢	遺物含有地	繩文土器片
68	岩谷古館	210-44-38	由利本荘市岩谷町字古館	船跡	空腹、腰郭
69	中館	210-44-40	由利本荘市中館字堤台	船跡	
70	舞根	210-44-41	由利本荘市深沢字横沢	遺物含有地	石棺・石築・石甕

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

計画的な調査と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。調査区のはば中心をグリッド原点 L P 30 (X = -67692.582, Y = -65162.359) として、この杭から世界測地系国家座標第 X 系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。

この東西南北に沿って  $4 \times 4\text{ m}$  のグリッドを設定し、グリッド原点 L P 30 を起点に、東西方向には東から西へ  $4\text{ m}$  ごとに「LM · · LP · · MA」 という 2 文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ  $4\text{ m}$  ごとに「22 · · 30 · · 39」 という 2 衔の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は  $4\text{ m}$  間隔の東西基線と南北基線の交点すべてに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した。

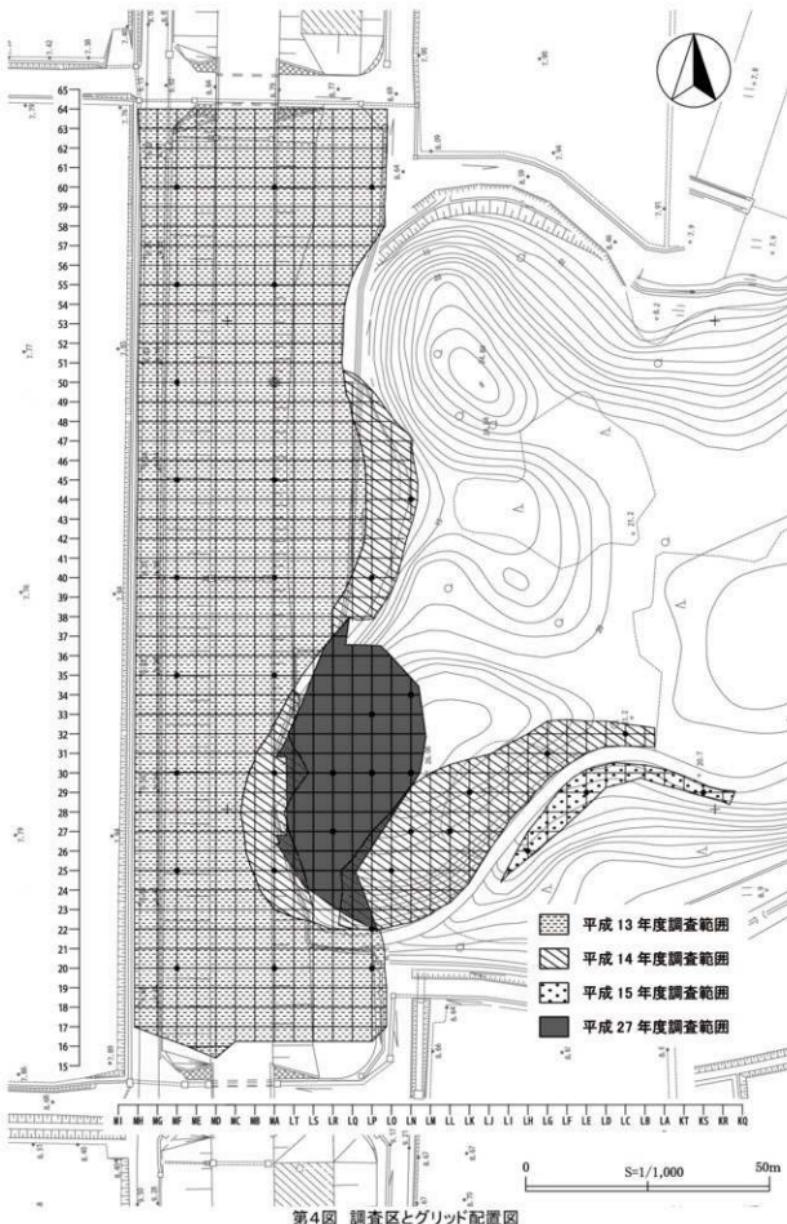
調査は確認調査の結果に基づき、包含層の掘り下げ及び遺構精査は全て手作業で行った。検出した遺構には、発見順に略記号および通し番号を付し精査を行った。また、出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は、平面図・断面図の作製および写真撮影によった。平面図・断面図の縮尺は 20 分の 1 を原則とした。遺跡・遺構の写真撮影は、デジタル一眼レフカメラ及び同コンパクトカメラを使用した。空中写真は業務委託により、ラジコン・ヘリコプターに搭載したデジタルカメラ及びフィルムカメラで撮影した。

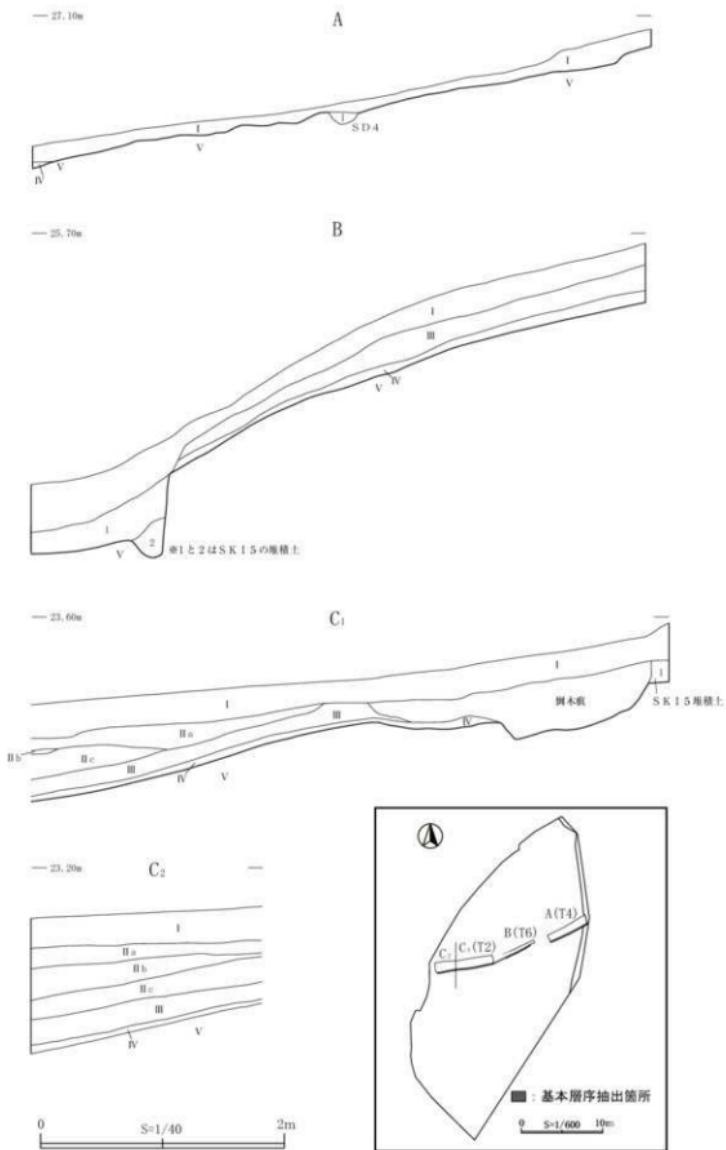
### 第2節 基本層序

遺跡の基本層序は、調査区中央部に入れたトレンチ (T 2 · 4 · 6) の南壁の土層から、以下のとおり観察できた。(第5図)

- I 黒褐色 (10YR 2/2) 森林系シルト：粘性弱 植物根多量 「現表土」。
- II a にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘土質シルト：Ⅲ層に比べしまり弱 Ⅲ層と V 層の混合土。
- II b にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘土質シルト：Ⅲ層に比べしまり弱 Ⅲ層と V 層の混合土。
- II c にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 粘土質シルト：Ⅲ層に比べしまり弱 Ⅲ層と V 層の混合土。  
※ II a · b · c は盛土であるが、土器片を含むため、古代以降の可能性が高い。
- III 黒褐色 (10YR 3/2) 粘土質シルト：しまりやや強 炭化物粒  $\phi 1 \sim 5\text{ mm}$  1%  
前近代の旧表土 遺物包含層(縄文～中世?)。
- IV 褐色～にぶい黄褐色 (10YR 4/4)～(10YR 6/4) 粘土質シルト：しまり強 漸移層。
- V 黄色～浅黄色 (2.5Y 8/6)～(2.5Y 7/4) 粘土質 しまり強 橙色の甘石  $\phi 1 \sim 30\text{ mm}$  を含む。



第4図 調査区とグリッド配置図



第5図 基本層序図

### 第3節 検出遺構と出土遺物

本調査で検出された遺構は、堅穴状遺構11基、土坑4基、焼土遺構1基、溝跡2条、土手跡1条、道路跡1条、柱穴様ピット9基である(第6図)。遺物は、縄文時代の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器、中世の陶磁器および時期不明の鉄滓等が中コンテナ(規格54×34×10cm)で3箱分出土した。

#### 1 堅穴状遺構

##### S K I 5(第7図、図版4-1・4-2・4-3)

《位置・確認》L O29・30、L P30グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S M26と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は検出された壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北西-南東)4.91m×短軸(北東-南西)3.68mと推測される。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》2層に分けられた。

《柱穴》なし。

《壁溝》東側で確認した。長さ6.74m、幅0.22~0.36m、確認面からの深さは0.21mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

##### S K I 7(第8図、図版4-1・4-4・4-5)

《位置・確認》L O31、L P31グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は検出された壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北東-南西)2.54m×短軸(南東-北西)1.36mと推測される。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《柱穴》なし。

《壁溝》東側で確認した。長さ2.54m、幅0.67~1.36m、確認面からの深さは0.28mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

##### S K I 10(第8図、図版5-1・5-2)

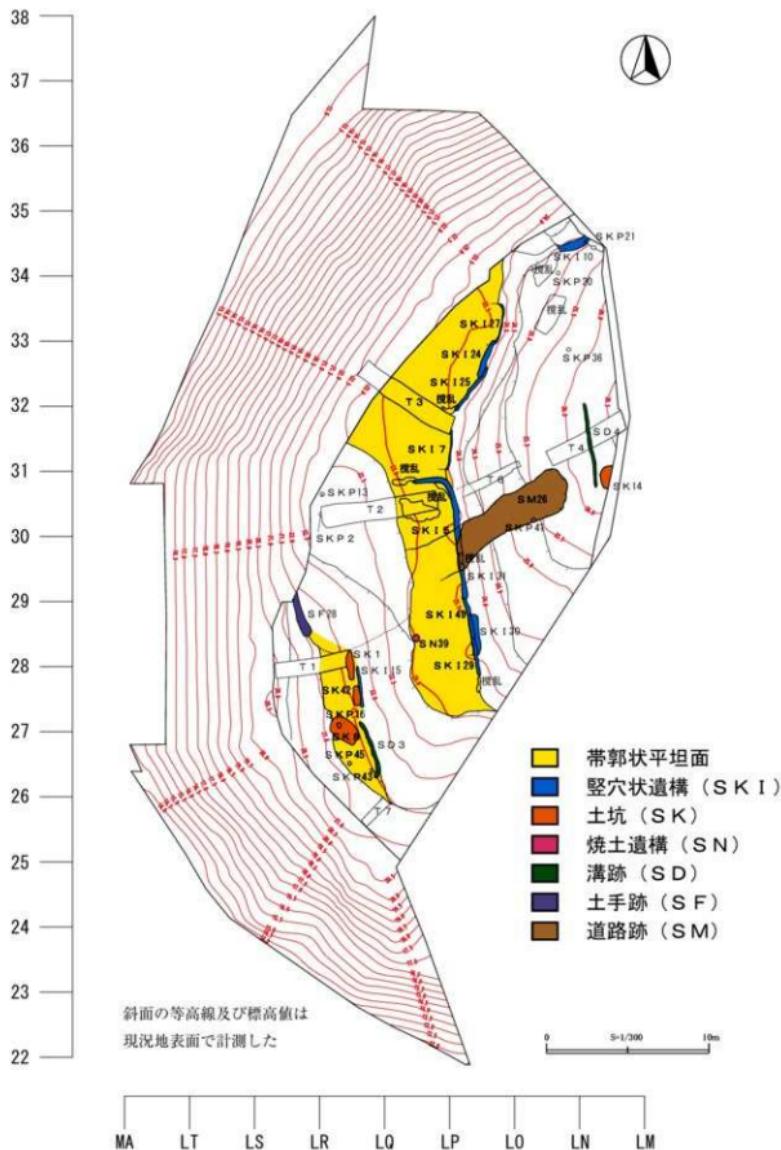
《位置・確認》LM34、L N34グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

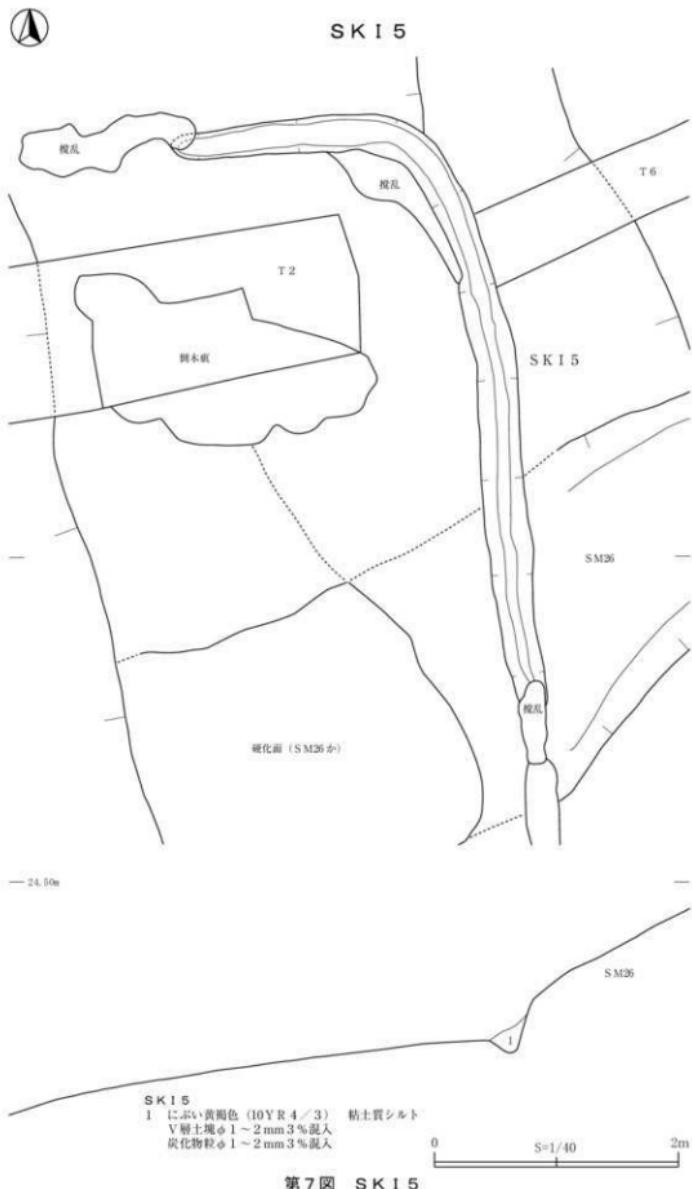
《平面形・規模》平面形は検出された遺構プランから方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北東-南西)1.64m×短軸(北西-南東)1.54mと推測される。

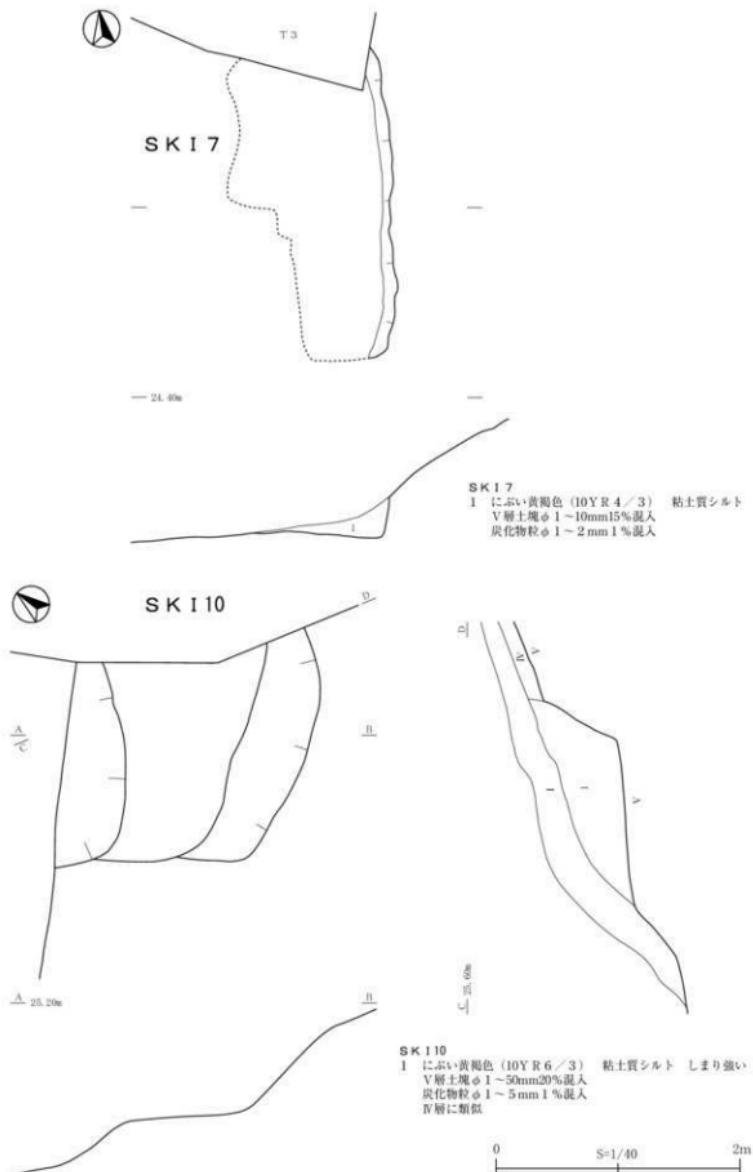
《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。



第6図 遺構配置図





第8図 SK I 7・10

《柱穴》なし。

《壁溝》なし。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K I 15(第11図、図版6-1)**

《位置・確認》L Q27・28グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S K 42と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は検出された壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北西-南東)2.56m×短軸(北東-南西)0.19mと推測される。

《壁・底面》壁と底面は確認できなかった。

《堆積土》1層である。

《柱穴》なし。

《壁溝》東側で確認した。長さ2.56m、幅0.13~0.19m、確認面からの深さは0.11mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K I 24(第9図、図版5-1・5-3)**

《位置・確認》L O32・33グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S K I 25・S K I 27と重複する。新旧は本遺構の方が新しい。

《平面形・規模》平面形は検出された壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北東-南西)2.44m×短軸(北西-南東)0.40mと推測される。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《柱穴》なし。

《壁溝》東側で確認した。長さ2.44m、幅0.20~0.40m、確認面からの深さは0.08mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K I 25(第9図、図版5-1・5-4)**

《位置・確認》L O31・32グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S K I 24と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は検出された壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北東-南西)3.4m×短軸(北西-南東)0.23mと推測される。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

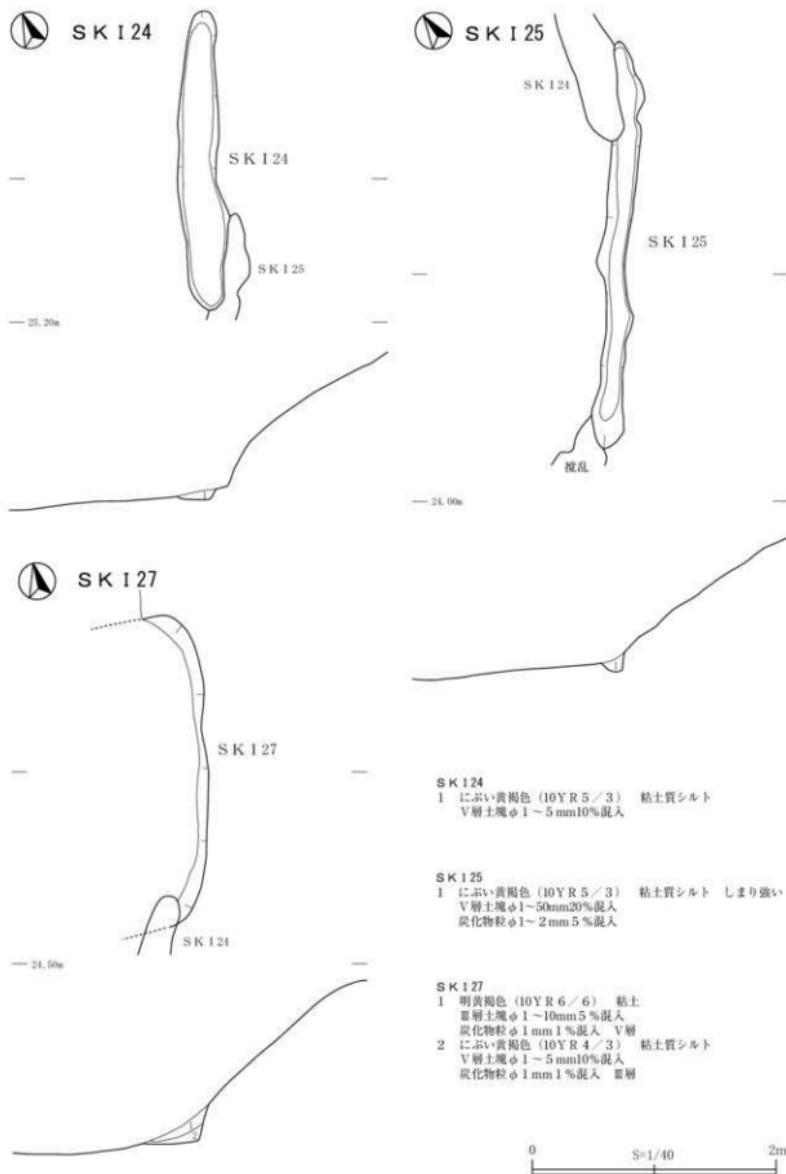
《堆積土》1層である。

《柱穴》なし。

《壁溝》東側で確認した。長さ3.4m、幅0.17~0.23m、確認面からの深さは0.12mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。



第9図 SK I 24・25・27

**S K I 27(第9図、図版5－1・5－5)**

《位置・確認》 L O 32・33グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》 S K I 24と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》 平面形は検出された遺構プランから方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北－南)2.52m×短軸(西－東)0.18mと推測される。

《壁・底面》 壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》 2層に分けられた。

《柱穴》 なし。

《壁溝》 なし。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》 出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K I 29(第10図、図版6－1・6－2)**

《位置・確認》 L O 27・28グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》 S K I 49・S K I 30と重複する。新旧は本遺構の方が新しい。

《平面形・規模》 平面形は検出された壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北西－南東)2.33m×短軸(北東－南西)0.23mと推測される。

《壁・底面》 壁と底面は確認できなかった。

《堆積土》 1層である。

《柱穴》 なし。

《壁溝》 東側で確認した。長さ2.33m、幅0.18～0.23m、確認面からの深さは0.07mである。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》 出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K I 30(第10図、図版6－1・6－2)**

《位置・確認》 L O 28グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》 S K I 49・S K I 29と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》 平面形は検出された遺構プランから方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北西－南東)2.51m×短軸(北東－南西)0.81mと推測される。

《壁・底面》 壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》 1層である。

《柱穴》 なし。

《壁溝》 なし。

《出土遺物》 遺物は出土しなかった。

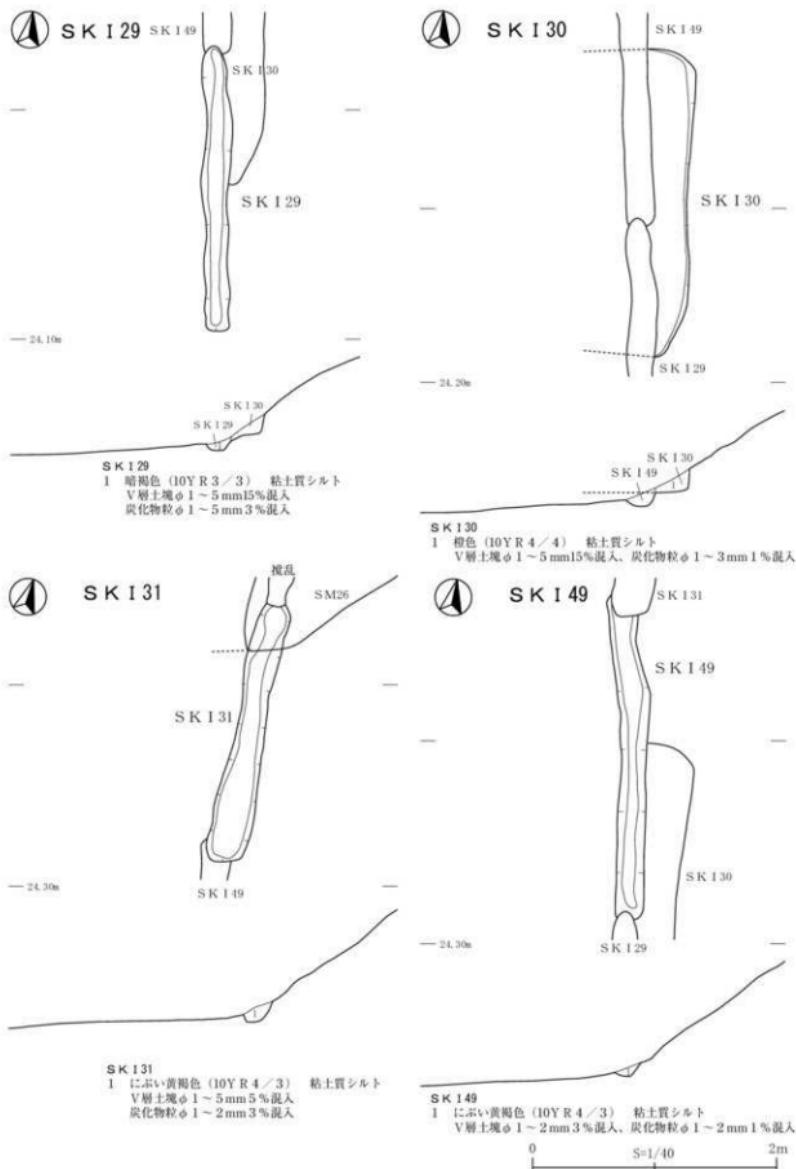
《遺構帰属時期》 出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K I 31(第10図・第13図、図版6－1・6－4)**

《位置・確認》 L O 29グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》 S M26・S K I 49と重複する。新旧は本遺構より S M26が新しく、S K I 49が古い。

《平面形・規模》 平面形は検出された壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北西



第10図 SK I 29・30・31・49

－南東)2.16m×短軸(北東－南西)0.34mと推測される。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《柱穴》なし。

《壁溝》東側で確認した。長さ2.16m、幅0.21～0.34m、確認面からの深さは0.12mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

#### S K I 49(第10図、図版6-1・6-5)

《位置・確認》L O28・29グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S K I 29・S K I 30・S K I 31と重複し、S K I 29・S K I 31より古く、S K I 30より新しい。

《平面形・規模》平面形は検出された壁溝から方形を呈するものと推察され、その規模は長軸(北西－南東)2.61m×短軸(北東－南西)0.28mと推測される。

《壁・底面》壁と底面は確認できなかった。いずれも木の根による搅乱で失われたものと思われる。

《堆積土》1層である。

《柱穴》なし。

《壁溝》東側で確認した。長さ2.61m、幅0.20～0.28m、確認面からの深さは0.12mである。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

## 2 土坑

#### S K 1(第11図、図版7-1)

《位置・確認状況》L Q27・28グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北西－南東)1.86m、短軸(北東－南西)0.45m、深さ0.52mである。

《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面は鍋底状を呈している。

《堆積土》2層に分けられた。

《出土遺物》なし。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

#### S K 8(第11図、図版7-2)

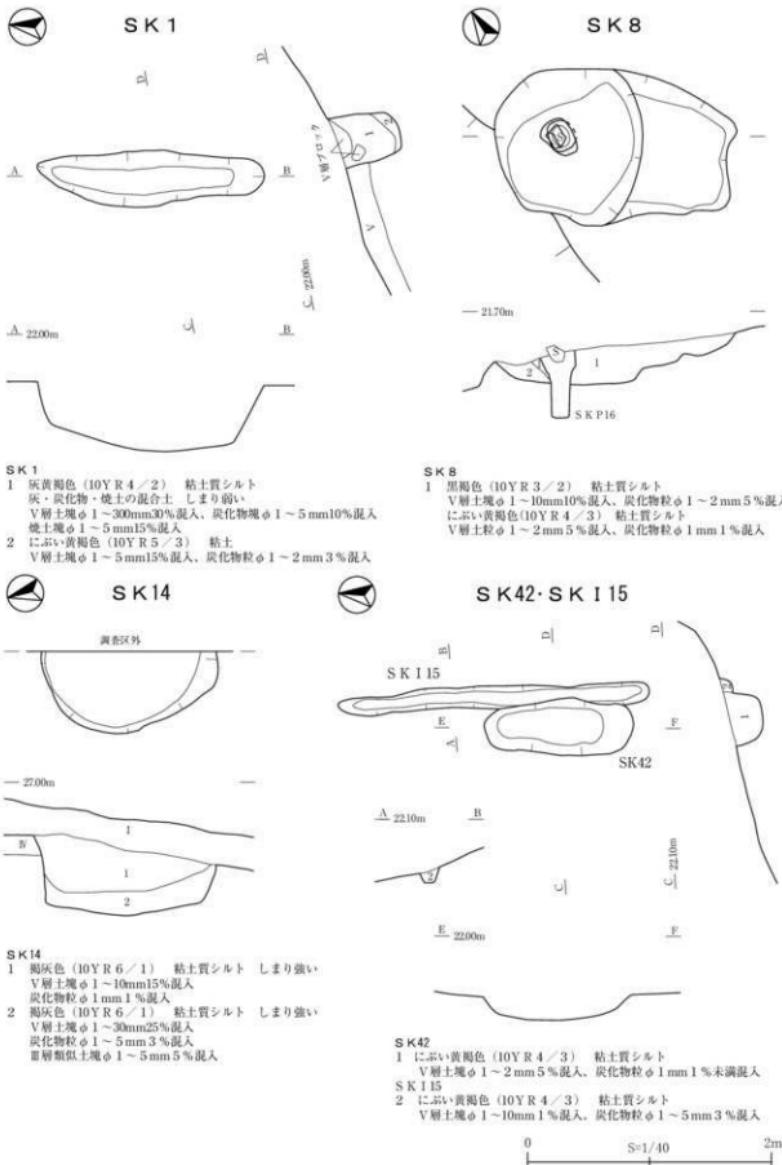
《位置・確認》L Q26・27グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S K P16と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北西－南東)1.98m、短軸(北東－南西)1.28m、深さ0.31mである。

《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面は不整形を呈する。

《堆積土》2層に分けられた。



第11図 SK 1 · 8 · 14 · 42、SK I 15

《出土遺物》なし。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K14(第11図、図版7-3)**

《位置・確認》L M30・31グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は半円形である。規模は長軸(北東-南西)1.43m、短軸(北西-南東)0.68m、深さ0.78mである。

《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面は平坦である。

《堆積土》2層に分けられた。

《出土遺物》なし。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K42(第11図、図版7-4)**

《位置・確認》L Q27グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S K I 15と重複する。新旧は本遺構の方が新しい。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北西-南東)1.22m、短軸(北東-南西)0.47m、深さ0.28mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》なし。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

### 3 焼土遺構

**S N39(第12図)**

《位置・確認》L P28グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は略円形である。規模は長軸(北西-南東)0.46m、短軸(北東-南西)0.45m、焼土下面のV層(地山)は、被熱を受けて下方2~5cmまで硬化赤変していた。

《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面はやや凸凹している。壁と底面は全体的に被熱によって赤変している。

《堆積土》1層の焼土が生成されている。

《出土遺物》なし。

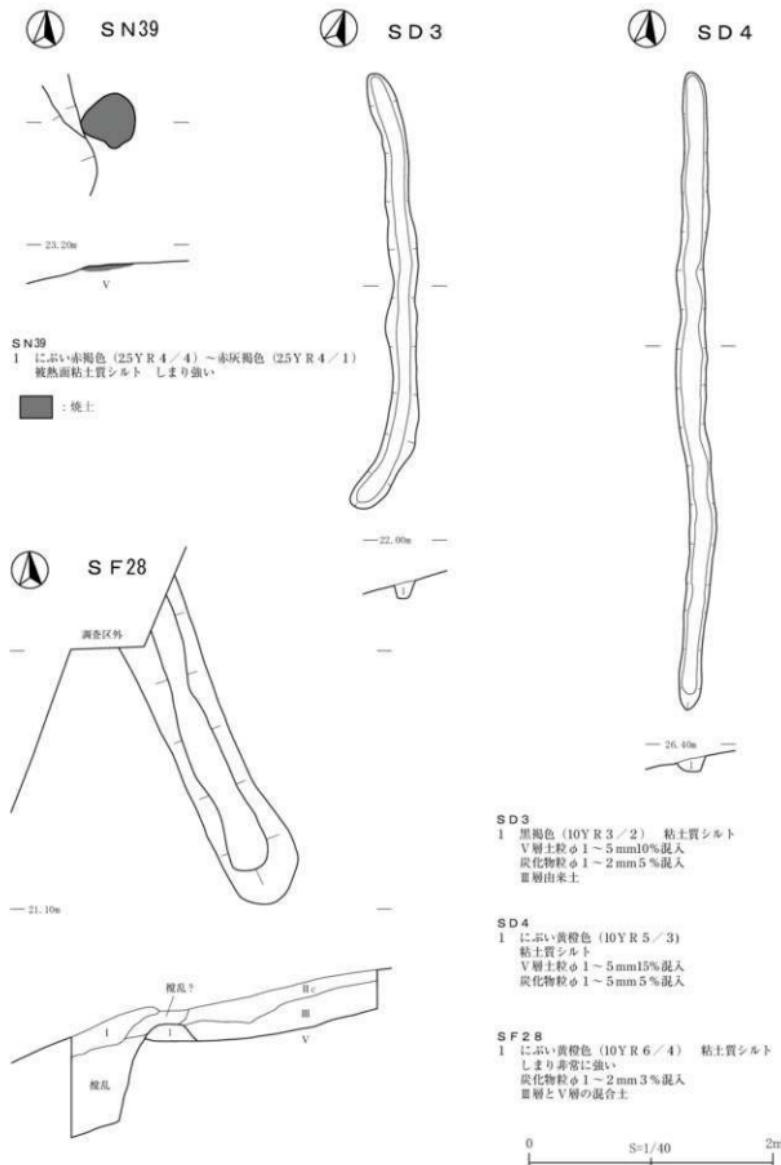
《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

### 4 溝跡

**S D 3(第12図、図版7-5)**

《位置・確認》L Q26・27グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。



第12図 S N39、S D3・4、S F28

《規模》長軸(北西－南東)3.56m、短軸(北東－南西)0.42m、深さ0.13mである。

《壁・底面》壁の傾きはやや急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》なし。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S D 4 (第12図、図版7-6)**

《位置・確認》L M30・31・32グリッドに位置する。第IV層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《規模》長軸(北西－南東)5.22m、短軸(北東－南西)0.26m、深さ0.11mである。

《壁・底面》壁の傾きは緩やかで、底面は平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》なし。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

## 5 土手跡

**S F 28(第12図、図版8-1・8-2・8-3)**

《位置・確認》L R28グリッドに位置する。第III層中で確認した。

《重複遺構》なし。

《規模》長軸(北西－南東)2.49m、短軸(北東－南西)0.61m、高さ0.38mである。

《壁》壁の傾きは急である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

## 6 道路跡

**S M 26(第13図・第10図、図版8-1・8-4・8-5・6-1)**

《位置・確認》L N30・31、L O29・30、L P29・30グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S K I 5・S K I 31・S K P41と重複する。新旧は本遺構の方が新しい。

《規模》確認長(北東－南西)7.89m、幅(北西－南東)2.50m～1.67m、深さ0.07mである。

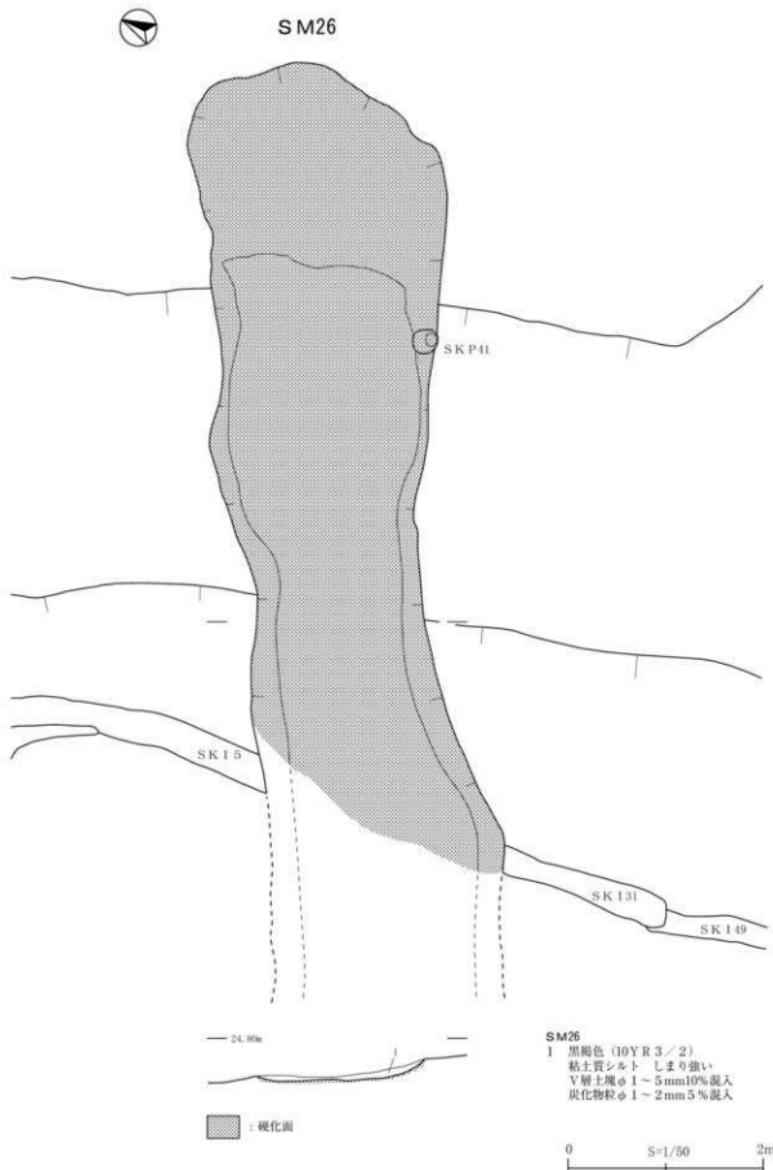
《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《柱穴》なし。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。



第13図 SM26

## 7 柱穴様ピット

### S K P 2(第14図)

《位置・確認》L Q30、L R30グリッドに位置する。第Ⅱb層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北西－南東)0.24m、短軸(北東－南西)0.16m、深さ0.39mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》2層に分けられた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

### S K P 13(第14図)

《位置・確認》L Q30グリッドに位置する。第Ⅱb層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北東－南西)0.26m、短軸(北西－南東)0.25m、深さ0.38mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》2層に分けられた。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

### S K P 16(第14図)

《位置・確認》L Q27グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》S K 8と重複する。新旧は本遺構の方が新しい。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北－南)0.32m、短軸(東－西)0.22m、深さ0.54mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

### S K P 20(第14図)

《位置・確認》L N34グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

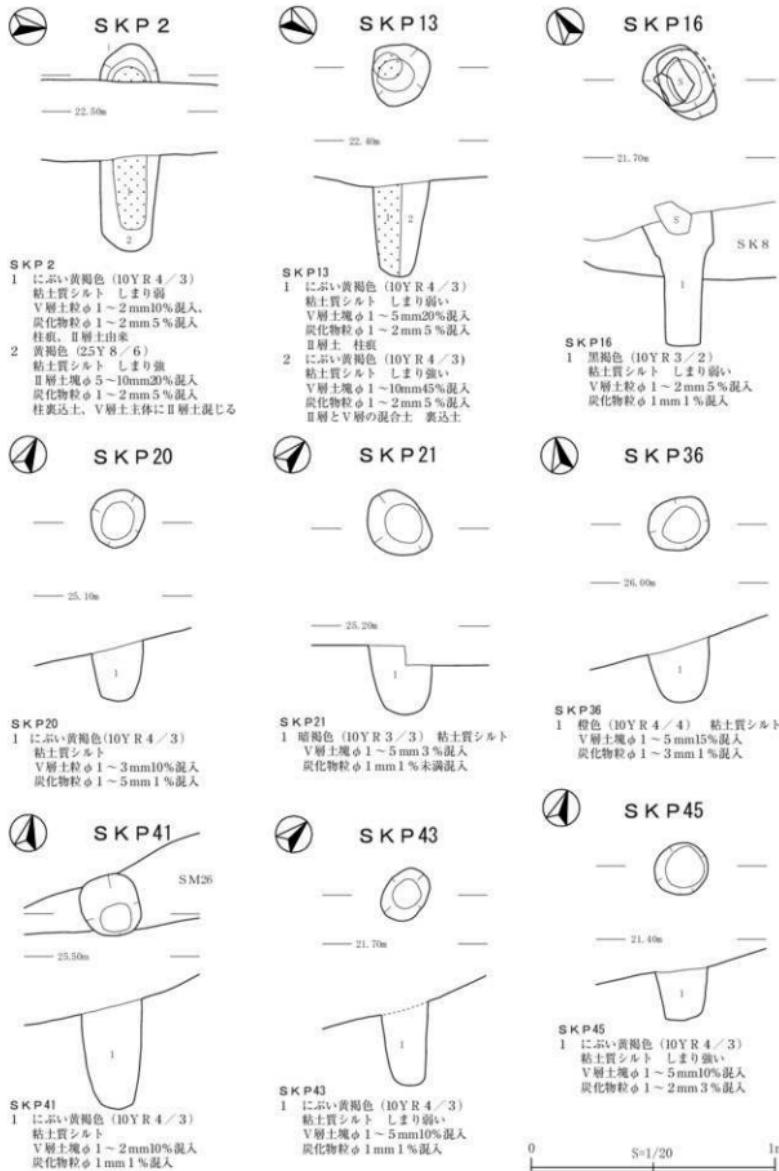
《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北－南)0.24m、短軸(西－東)0.21m、深さ0.22mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。



第14図 SKP 2・13・16・20・21・36・41・43・45

**S K P 21(第14図)**

《位置・確認》LM34グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北西－南東)0.29m、短軸(北東－南西)0.24m、深さ0.28mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K P 36(第14図)**

《位置・確認》LN32グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北西－南東)0.24m、短軸(北東－南西)0.20m、深さ0.24mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K P 41(第14図)**

《位置・確認》LN30グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》SM26と重複する。新旧は本遺構の方が古い。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北西－南東)0.26m、短軸(北東－南西)0.24m、深さ0.43mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

**S K P 43(第14図)**

《位置・確認》LQ26グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北－南)0.23m、短軸(西－東)0.15m、深さ0.33mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

## SKP45(第14図)

《位置・確認》LQ26グリッドに位置する。第V層上面で確認した。

《重複遺構》なし。

《平面形・規模》平面形は楕円形である。規模は長軸(北西-南東)0.22m、短軸(北東-南西)0.21m、深さ0.19mである。

《壁・底面》壁の傾きは急で、底面はほぼ平坦である。

《堆積土》1層である。

《出土遺物》遺物は出土しなかった。

《遺構帰属時期》出土遺物がなく、時期は不明である。

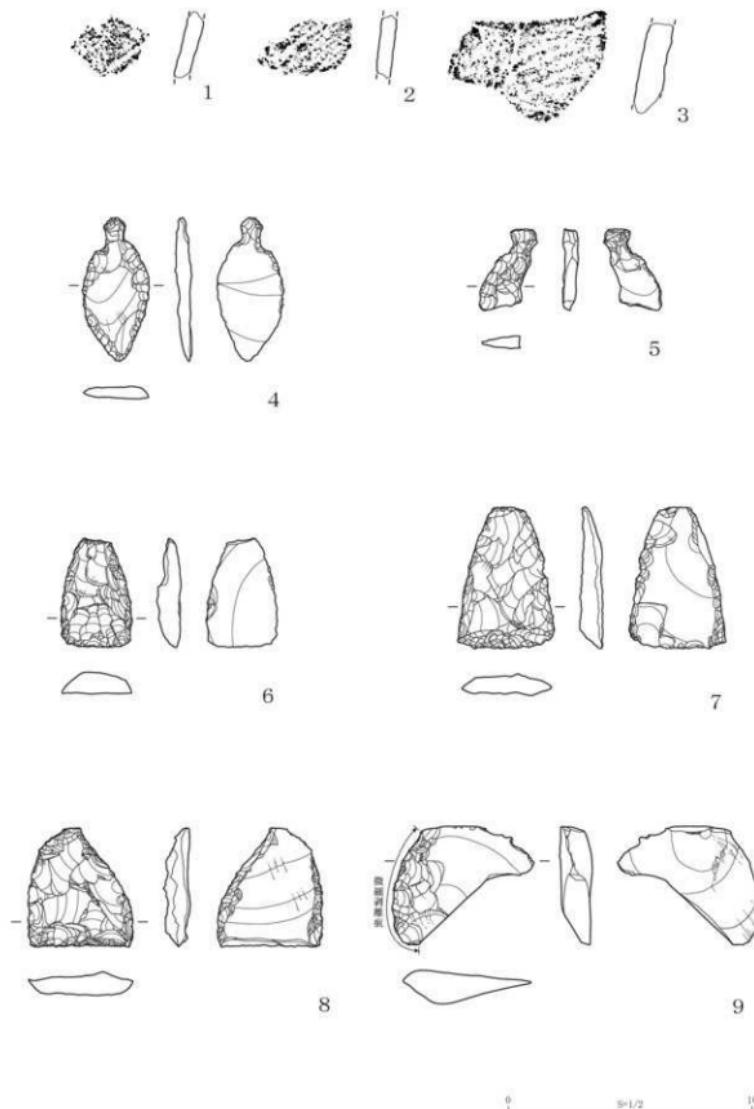
## 8 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物は少なく、特に遺構内から出土した遺物は皆無で、遺構の帰属時期を特定することは困難であった。

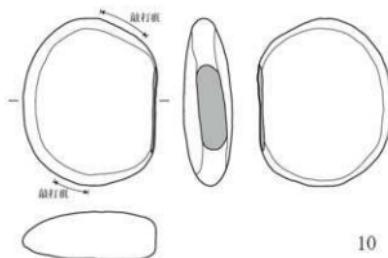
遺構外出土遺物も縄文土器、須恵器・土師器、陶器の破片、石匙・篦状石器・削器・搔器・擦り石等の石器類のほか、剥片・残核、鉄滓が少量出土したのみである。

第15図1・3は地紋縄文に沈線が施された土器で、縄文時代後期のものと思われる。また第17図13は土師器壺、14は叩き目のある土師器壺の破片である。15は鉢(擂鉢か)の口縁部、16は碗底部の小破片であり詳細は不明であるが、中世以降と思われる。17は鉄滓である。

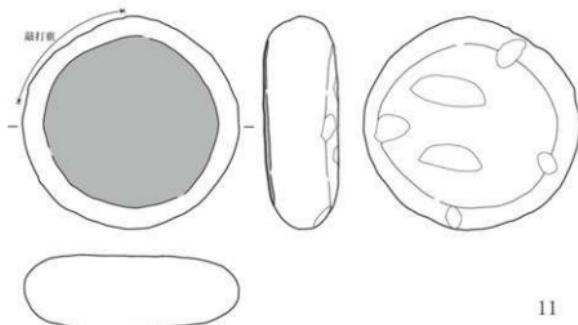
その他に、縄文時代後期、平安時代、中世以降に帰属する遺物が出土した。過年度の調査でも沖積地部分から縄文時代後期・平安時代・中世の遺物が、丘陵部分から縄文時代後期・平安時代・中世以降の遺物が出土しており、出土遺物の様相としては調和的であるといえよう。



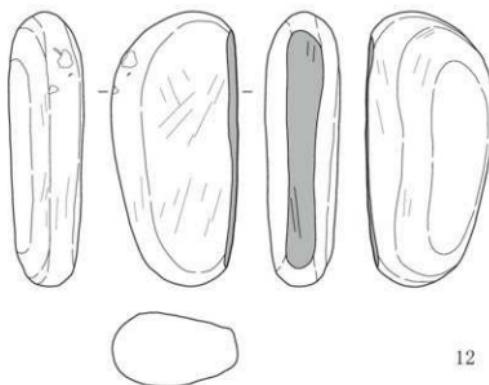
第15図 出土遺物（1）



10



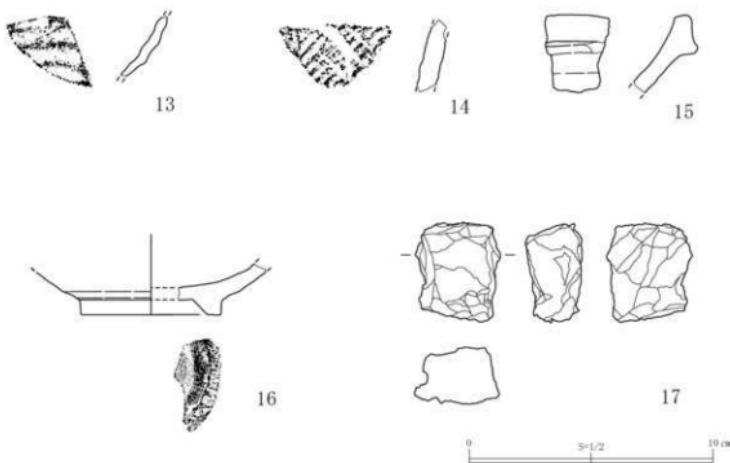
11



12



第16図 出土遺物（2）



第17図 出土遺物（3）

第3表 出土石器一覧（縄文時代）

挿図番号	出土 地點	器種	層位	大きさ			重量	石質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
第15図-4	L N34	石匙	第Ⅲ層	58.5mm	27.5mm	7.0mm	8.5 g	珪質頁岩	
第15図-5	L N31	石匙	第Ⅲ層	34.0mm	24.0mm	6.5mm	3.7 g	珪質頁岩	
第15図-6	L N33	石鎌	第Ⅲ層	45.0mm	29.0mm	10.0mm	12.6 g	珪質頁岩	
第15図-7	L Q28	石鎌	第Ⅲ層	58.0mm	40.0mm	9.5mm	22.9 g	珪質頁岩	
第15図-8	L O29	削器	第Ⅲ層	49.0mm	43.0mm	11.0mm	23.7 g	珪質頁岩	石鎌の未製品？
第15図-9	L Q26	搔器	第Ⅲ層	48.5mm	59.0mm	13.0mm	28.7 g	珪質頁岩	
第16図-10	表採	擦り石	—	103.0mm	83.0mm	30.0mm	402.5 g	閃綠岩	
第16図-11	L N34	擦り石	第Ⅲ層	131.0mm	133.0mm	46.0mm	1250.5 g	閃綠岩	
第16図-12	L N34	擦り石	第Ⅲ層	170.0mm	78.0mm	46.0mm	786.5 g	安山岩	

## 第4章 理化学的分析

### 第1節 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadidze・黒沼保子

#### 1はじめに

由利本荘市に位置する上谷地遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2試料と方法

試料は炭化材13点である。SK I 5堅穴状遺構の1層出土のNo.1 (PLD-29906)と2層出土のNo.2 (PLD-29907)、SK I 7堅穴状遺構の1層出土のNo.3 (PLD-29908)、SK I 15堅穴状遺構の1層出土のNo.4 (PLD-29909)、SK I 25堅穴状遺構の1層出土のNo.5 (PLD-29910)、SK I 27堅穴状遺構の2層出土のNo.6 (PLD-29911)、SK I 土坑の1層出土のNo.7 (PLD-29912)と2層出土のNo.8 (PLD-29913)、SK 42土坑の1層出土のNo.9 (PLD-29914)、SD 3溝跡の1層出土のNo.10 (PLD-29915)、SD 4溝跡の1層出土のNo.11 (PLD-29916)、SM 26道路跡の1層出土のNo.12 (PLD-29917)、SK P 02柱穴様ピットの2層出土のNo.13 (PLD-29918)である。SK I 土坑のNo.7 (PLD-29912)は最終形成年輪が残存していたが、その他の試料は部位不明で最終形成年輪は残存していなかった。

測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

#### 3結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、第18図と第19図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていい値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730 ± 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

第4表 測定資料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-29906	遺構：SK15堅穴状遺構 層位：1 試料No.1	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29907	遺構：SK15堅穴状遺構 層位：2 試料No.2	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29908	遺構：SK17堅穴状遺構 層位：1 試料No.3	種類：炭化材(クリ) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29909	遺構：SK115堅穴状遺構 層位：1 試料No.4	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29910	遺構：SK125堅穴状遺構 層位：1 試料No.5	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29911	遺構：SK127堅穴状遺構 層位：2 試料No.6	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29912	遺構：SK1土坑 層位：1 試料No.7	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29913	遺構：SK1土坑 層位：2 試料No.8	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N) 処理参考状態い
PLD-29914	遺構：SK42土坑 層位：1 試料No.9	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29915	遺構：SD3溝跡 層位：1 試料No.10	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29916	遺構：SD4溝跡 層位：1 試料No.11	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29917	遺構：SM26道路跡 層位：1 試料No.12	種類：炭化材(クリ) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)
PLD-29918	遺構：SKP2柱穴様ピット 層位：2 試料No.13	種類：炭化材(広葉樹) 試料の性状：最終形成年輪以外、部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：12N, 水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：12N)

<sup>14</sup>C年代の曆年較正にはOxCal4.2(較正曲線データ：IntCal13)を使用した。なお、 $1\sigma$ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 曆年代範囲は95.4%信頼限界的曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-29906 SKI5堅穴状遺構 No.1	-25.52 $\pm$ 0.22	2937 $\pm$ 18	2935 $\pm$ 20	1195-1141 cal BC (49.9%) 1134-1114 cal BC (18.3%)	1213-1056 cal BC (95.4%)
PLD-29907 SKI5堅穴状遺構 No.2	-25.23 $\pm$ 0.22	4250 $\pm$ 20	4250 $\pm$ 20	2897-2881 cal BC (68.2%)	2908-2874 cal BC (95.4%)
PLD-29908 SKI7堅穴状遺構 No.3	-26.22 $\pm$ 0.20	2961 $\pm$ 18	2960 $\pm$ 20	1215-1188 cal BC (26.2%) 1181-1157 cal BC (23.2%) 1147-1129 cal BC (18.8%)	1257-1251 cal BC (1.0%) 1231-1117 cal BC (94.4%)
PLD-29909 SKI15堅穴状遺構 No.4	-25.79 $\pm$ 0.18	1161 $\pm$ 17	1160 $\pm$ 15	778-790 cal AD (11.6%) 827-841 cal AD (8.6%) 863-897 cal AD (34.7%) 927-943 cal AD (13.3%)	775-901 cal AD (78.2%) 921-951 cal AD (17.2%)
PLD-29910 SKI25堅穴状遺構 No.5	-26.49 $\pm$ 0.20	598 $\pm$ 16	600 $\pm$ 15	1313-1330 cal AD (25.9%) 1339-1358 cal AD (29.0%) 1388-1397 cal AD (13.3%)	1304-1365 cal AD (74.3%) 1383-1404 cal AD (21.1%)
PLD-29911 SKI27堅穴状遺構 No.6	-26.23 $\pm$ 0.21	445 $\pm$ 16	445 $\pm$ 15	1436-1450 cal AD (68.2%)	1429-1456 cal AD (95.4%)
PLD-29912 SK1土坑 No.7	-25.13 $\pm$ 0.20	437 $\pm$ 16	435 $\pm$ 15	1440-1451 cal AD (68.2%)	1431-1465 cal AD (95.4%)
PLD-29913 SK1土坑 No.8	-22.94 $\pm$ 0.22	428 $\pm$ 16	430 $\pm$ 15	1440-1456 cal AD (68.2%)	1435-1472 cal AD (95.4%)
PLD-29914 SK42土坑 No.9	-27.11 $\pm$ 0.24	1162 $\pm$ 20	1160 $\pm$ 20	778-791 cal AD (11.3%) 807-816 cal AD (4.8%) 826-841 cal AD (9.7%) 862-896 cal AD (31.4%) 927-942 cal AD (11.0%)	775-901 cal AD (79.1%) 921-952 cal AD (16.3%)
PLD-29915 SD3溝跡 No.10	-25.47 $\pm$ 0.19	426 $\pm$ 17	425 $\pm$ 15	1440-1460 cal AD (68.2%)	1435-1475 cal AD (95.4%)
PLD-29916 SD4溝跡 No.11	-26.84 $\pm$ 0.27	419 $\pm$ 19	420 $\pm$ 20	1442-1465 cal AD (68.2%)	1436-1487 cal AD (95.4%)
PLD-29917 SM26道路跡 No.12	-27.15 $\pm$ 0.24	3164 $\pm$ 21	3165 $\pm$ 20	1489-1485 cal BC (5.5%) 1451-1416 cal BC (62.7%)	1497-1409 cal BC (95.4%)
PLD-29918 SKP2柱穴様ピット No.13	-28.04 $\pm$ 0.19	684 $\pm$ 17	685 $\pm$ 15	1280-1297 cal AD (68.2%)	1275-1304 cal AD (77.0%) 1366-1384 cal AD (18.4%)

#### 4 考察

以下、各試料の曆年較正結果のうち $2\sigma$ 曆年代範囲(確率95.4%)に着目して、遺構ごとに結果を整理する。縄文時代の土器編年と曆年代の対応関係については小林(2008)を参照した。

S K I 5 壓穴状遺構では、1層出土のNo. 1 (PLD-29906)は1213-1056 cal BC (95.4%)で縄文時代晚期前葉、2層出土のNo. 2 (PLD-29907)は2908-2874 cal BC (95.4%)で、縄文時代中期後半に相当する曆年代を示した。

S K I 7 壓穴状遺構の1層出土のNo. 3 (PLD-29908)は、1257-1251 cal BC (1.0%)および1231-1117 cal BC (94.4%)で、縄文時代晚期前葉に相当する。

S K I 15 壓穴状遺構の1層出土のNo. 4 (PLD-29909)は、775-901 cal AD (78.2%)および921-951 cal AD (17.2%)であった。これは8世紀後半～10世紀中頃で、奈良時代～平安時代前期に相当する。

S K I 25 壓穴状遺構の1層出土のNo. 5 (PLD-29910)は、1304-1365 cal AD (74.3%)および1383-1404 cal AD (21.1%)であった。これは、14世紀初頭～15世紀初頭で、鎌倉時代～室町時代に相当する。

S K I 27 壓穴状遺構の2層出土のNo. 6 (PLD-29911)は、1429-1456 cal AD (95.4%)であった。これは15世紀前半～中頃で、室町時代に相当する。

S K I 土坑では、1層出土のNo. 7 (PLD-29912)が1431-1465 cal AD (95.4%)、2層出土のNo. 8 (PLD-29913)が1435-1472 cal AD (95.4%)であった。どちらも15世紀前半～後半で、室町時代に相当する。

S K 42 土坑の1層出土のNo. 9 (PLD-29914)は、775-901 cal AD (79.1%)および921-952 cal AD (16.3%)であった。これは、8世紀後半～10世紀中頃で、奈良時代～平安時代前期に相当する。

S D 3 溝跡の1層出土のNo. 10 (PLD-29915)は、1435-1475 cal AD (95.4%)であった。これは15世紀前半～後半で、室町時代に相当する。

S D 4 溝跡の1層出土のNo. 11 (PLD-29916)は、1436-1487 cal AD (95.4%)であった。これは15世紀前半～後半で、室町時代に相当する。

S M 26 道路跡の1層出土のNo. 12 (PLD-29917)は、1497-1409 cal BC (95.4%)で、縄文時代後期後葉に相当する。

S K P 2 柱穴様ピットでは、2層出土の炭化材 (No. 13 : PLD-29918) は、1275-1304 cal AD (77.0%) および1366-1384 cal AD (18.4%) であった。これは13世紀後半～14世紀初頭もしくは15世紀後半で、鎌倉時代もしくは室町時代に相当する。

木材は最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる(古木効果)。S K I 土坑の1層から出土した炭化材 (No. 7 : PLD-29912) は最終形成年輪が残存しているため、得られた年代は木材が伐採もしくは枯死した年代を示していると考えられる。それ以外の試料は最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、年代測定の結果は、木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

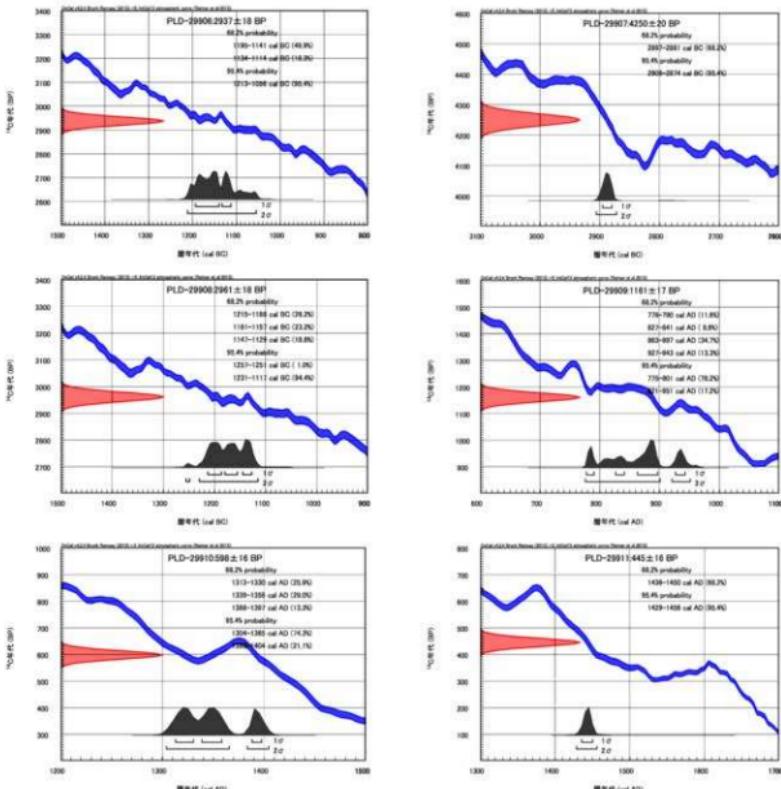
#### 引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

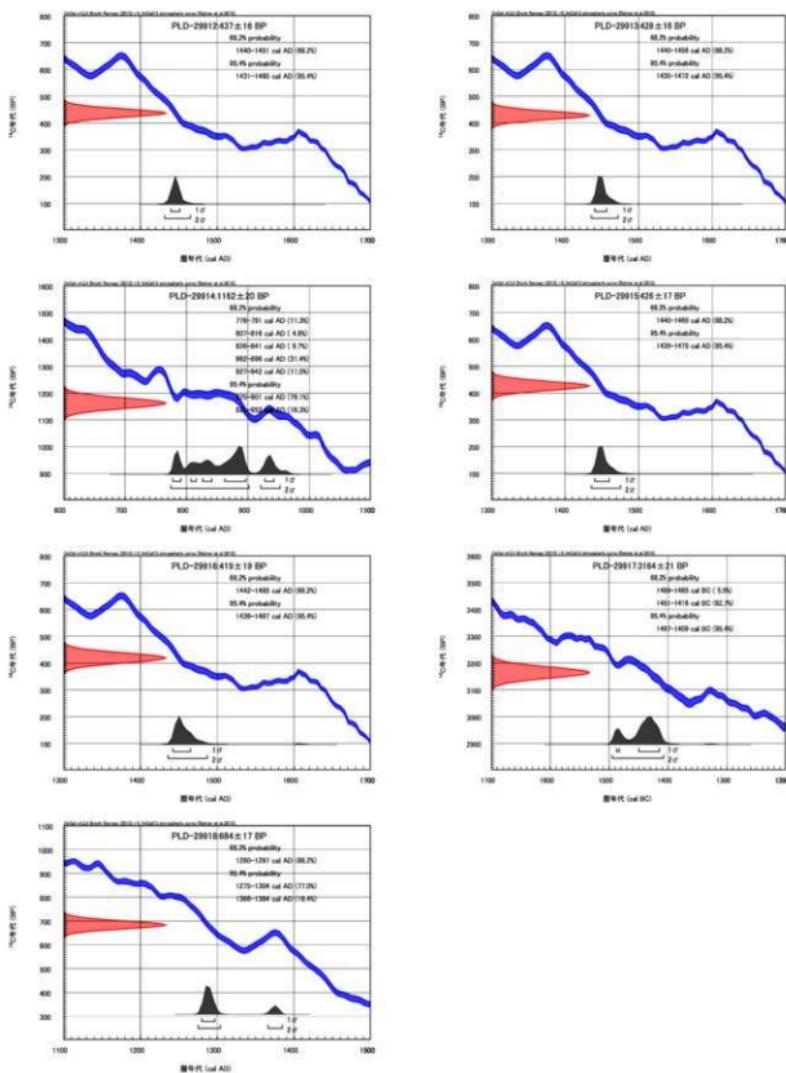
小林謙一(2008)縄文時代の層年代、小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし—縄文時代研究の編年体系—」:257-269、同成社。

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」:3-20、日本第四紀学会。

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



第18図 歴年校正結果(1)



第19図 歴年較正結果（2）

## 第5章 総括

今回の調査では、竪穴状遺構11基、土坑4基、焼土遺構1基、溝跡2条、土手跡1条、道路跡1条、柱穴様ピット9基を検出した。これらの遺構に伴う遺物は確認できなかったが、周辺から縄文時代後期、平安時代、中世以降の遺物が出土した。過年度(平成13~15年度)に実施した調査でも該期の遺構・遺物が確認されていることから、遺構内出土遺物はないものの、この時期に伴う遺構群と想定される。

今回の調査区は急峻な丘陵の上に立地しており、また遺構覆土の残存状況も著しく不良であったことから、遺構の帰属時期を確定することは困難であった。ただし盛土であるⅡa~c層から土器片が出土していることから、当該層は古代以降の造成土であることが想定される。

放射性炭素年代測定値が得られた試料は第4章第1節に掲載したとおりであるが、その中でも試料の一次性が高いと考えられるSK127・SK1・SKP2からは中世以降の測定値が得られた。また他の試料からも縄文時代や平安時代に相当する測定値が得られており、遺構外出土遺物から想定される遺跡の帰属時期と概ね調和的といえる。

上谷地遺跡の丘陵部分においては、過年度の調査においても遺構内出土遺物が確認されず、その帰属時期は周辺の遺構外出土遺物等から推測された。今回の調査でもその状況は変わらず、遺構内からの一次的な出土遺物から帰属時期を決定することはできなかった。いっぽう、西側の斜面下方に広がる沖積地部分においては、縄文時代・平安時代・中世以降の遺構・遺物が明確に確認されており、丘陵部に比して活発な人間活動がうかがわれる。

本遺跡から1km余り北側に立地する岩倉館跡では、斜面をベンチカットして下方に開口し、3方の壁面しか持たない形態を持つ、中世の竪穴状遺構が複数確認されている。またこの竪穴状遺構は柱穴を伴い、壁下に沿って溝が巡るものも確認された。本遺跡で確認された竪穴状遺構は柱穴も明確ではなく上部構造も不明ではあるが、形態的特徴は共通しており、類似する事例と考えても良いのではないだろうか。その点ではSD3・4も同様の壁溝であったことも想定される。

平成17年刊行の報告書でも触れられているとおり、上谷地遺跡は既調査の範囲を含め、本来的にはさらに大きな広がりを持つと想定される。また各時期においても、現在までの調査で居住域は確認されていない。

山麓部からの湧水を受ける沖積地部分においては、縄文時代に水晒し場、平安時代に祭祀域が営まれ、遺構数に比して多量の遺物が出土した。また中世以降については明確な遺構・遺物とも乏しいが、放射性炭素年代値を示す試料は得られている。これらのことから、調査区の周囲には各时期における居住域その他が広がっており、またその範囲も時期により変遷したことも想定されよう。

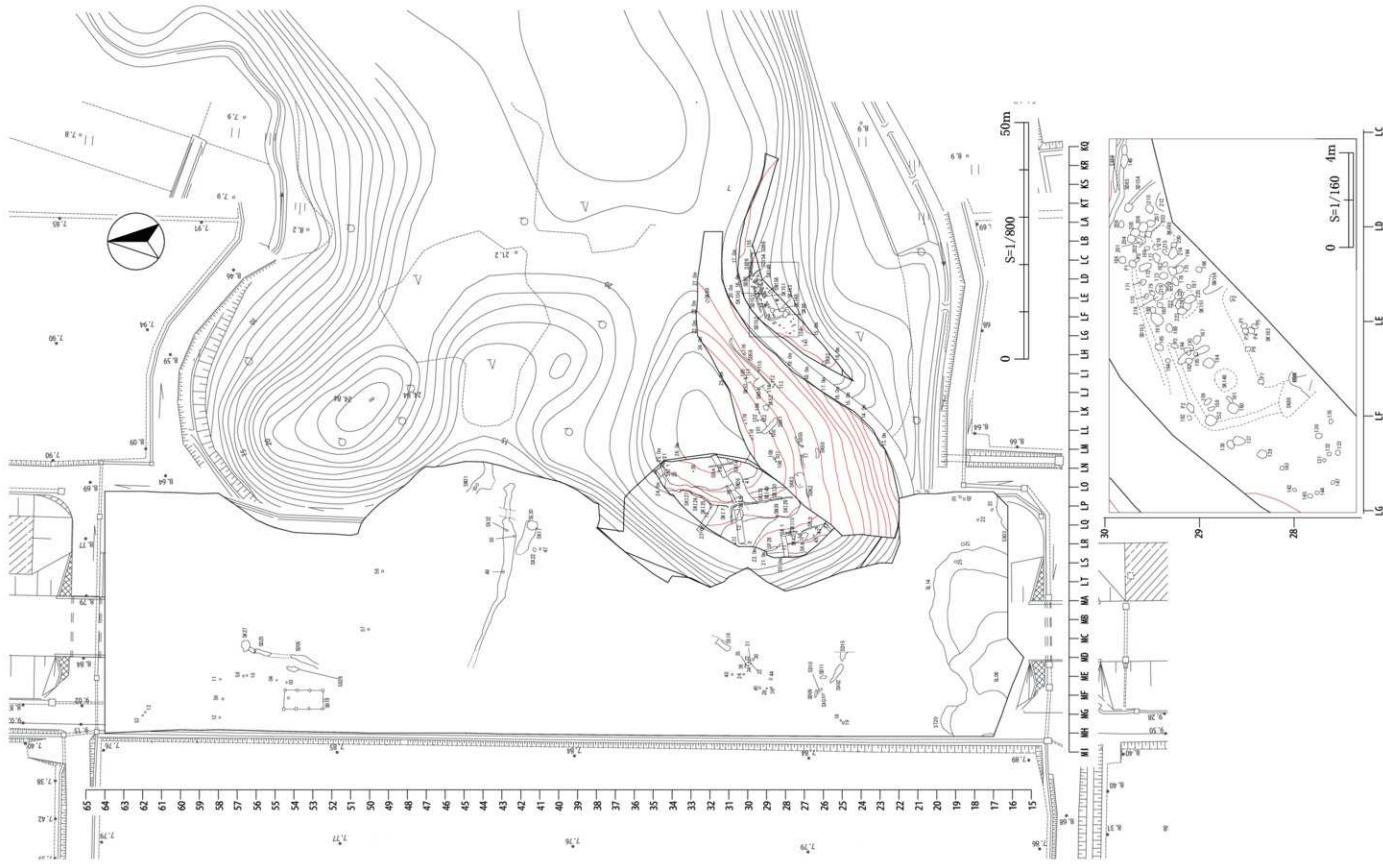
### 参考文献

秋田県教育委員会 『上谷地遺跡・新谷地遺跡』 秋田県文化財調査報告書第395集 2005(平成17)年

秋田県教育委員会 『岩倉館跡』 秋田県文化財調査報告書第423集 2007(平成19)年



第20図 上谷地遺跡範囲図



第21図 秋田県教育委員会発掘調査における上谷地道路構配図



1 遺跡遠景（北から）：南に鳥海山を望む（由理権・駅家研究会提供）



2 遺跡遠景（南西から）（由理権・駅家研究会提供）



1 調査区遠景（南東上空から）



2 調査区遠景（南西上空から）



1 調査区全景（西から）



2 調査区全景（上が東）



1 SK15・7 (西から)



2 SK15 (北西から)



3 SK15 (西から)



4 SK17 (南西から)



5 SK17 (西から)



1 SK I 10-24-25-27 (西から)



2 SK I 10 (北から)



3 SK I 24 (西から)



4 SK I 25 (西から)



5 SK I 27 (西から)



1 SKI 15·29·30·31·49 (西から)



2 SKI 29 (西から)



3 SKI 30 (西から)



4 SKI 31 (西から)



5 SKI 49 (西から)



1 SK 1 (西から)



2 SK 8 (南西から)



3 SK 14 (西から)



4 SK 42 (北西から)



5 SD 3 (北西から)



6 SD 4 (北西から)



1 SF28・SM26 (西から)



2 SF28 (南から)



3 SF28 (南西から)



4 SM26 (西から)



5 SM26 (西から)



第15図-1



第15図-2



第15図-3



第15図-4



第15図-5



第15図-6



第15図-7

出土遺物（1）

（縮尺不同）



第15図-8



第15図-9



第16図-10



第16図-11



第17図-12



第17図-15



第17図-16



第17図-13



第17図-17

出土遺物 (2)

(縮尺不同)

## 報 告 書 抄 錄

秋田県文化財調査報告書第506集  
上 谷 地 遺 蹤 (第2次)  
— 日本海沿岸東北自動車道  
(本荘～岩城)付加車線工事に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書 I —

印刷・発行 平成28年9月  
編 集 秋田県埋蔵文化財センター  
〒014-0802 大仙市払田字牛嶋20番地  
電話(0187)69-3331 FAX(0187)69-3330  
発 行 秋田県教育委員会  
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号  
電話(018)860-5193